
双子の兄が歩く道～ネギま！～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の兄が歩く道（ネギま！）

【Nコード】

N6336Z

【作者名】

十六夜哀音

【あらすじ】

PC閲覧推奨

ネギま好きだった俺はいつの間にか転生していた・・・
死んだ記憶はないし、テンプレした記憶も無い。だっていうのに赤ん坊！？

もう1人の赤ん坊は・・・ネギ・スプリングフィールド？

どうやら俺は双子の兄だそうだ・・・何故兄がネギじゃない！！

似非敬語で素を隠しながらネギま！を辿る？物語が今始まる・・・

この物語は残酷な表現・アンチ？・ガールズラブ？等が含まれる

可能性がありますのでご注意ください。【含まれていない可能性もあります】

ご都合主義に関して・・・これを用いない限り絶対に説明不能なことがあるのでタグを入れました。

チート能力に関して・・・弱チート?ですが、一応能力を付与されているのでタグをつけました。

尚、更新は不定期です。

現在7歩目執筆中。

1 歩目「イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

1 歩目は前作と同じです。

改行を増やしてみたのですがいかがでしょうか？

初めて読んでくださる方はこのままお読みいただけると嬉しいですよ。

1 1 年 1 2 月 2 2 日 若干修正

1 1 年 1 2 月 2 7 日 若干修正

1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

目の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。

辺りを炎に包んだ元凶は既に目の前にいる男に殲滅された。

地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まった女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。

俺と子供目の前には元凶を殲滅した男がローブを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。

その男は俺たちの方へと動き出す。

「お前達・・・そうかお前達が・・・お姉ちゃんを守っているつもりか？」

もう1人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。

俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。

そう知っていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。

「大きくなったな・・・お、そうだお前達に・・・この杖をやるわ。俺の形見だ・・・一本しかねえけどな・・・」

そう言って、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取

った俺はすぐに弟へと杖を手渡した。

「お父さん・・・？」

そんな男の姿に弟は眩くが、俺から手渡された杖が重かったのだからバランスを崩す。

「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆっくり治してもらえ。悪いな、お前達には何もしてやれなくて・・・」

男はそう言いながら空に浮かぶ。

「・・・お父さん？」

「こんなこと言えた義理じゃねえが・・・元気に育て、幸せにな！」

彼は何を想って此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。

そして飛び去る男の背中を「お父さん！！」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた！だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

ここはメルディアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。

今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。

そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド、つまりはネギの双子の兄である。

何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になっていないのかわからないが、推察するに俺が転生者^{イレギュラー}であることが原因ではないかと考えている。

俺は自称『転生者』である。何故自称かとはわれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解^{チート}不能能力をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。

要するに、現実^{前世}で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。

紛れ込んだといっても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・

『現実』の記憶を持っているが、『物語』の中に存在する身体であるアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギ^原が主役の世界に居続ける、夢^{現実に戻らない}から覚めないのであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。

さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼の『千の呪文の魔法使い』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。

更にはこの七年間で、弟と禁書庫に籠ることで『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳才能や開発力を持っていると考えられる。

そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかつたりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしませんが覚えてはいる。

これらの事から、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。

因みに『現実』ではそんなに料理をしなかったのに、この歳でかなり美味しい料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲・ある程度の体術が使えるようになっていたりもした。

これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。

どこことなくそんな人物を『現実』の別の物語作品で見たことがあるような気もするのだが・・・

そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。

「……ク君！……アルク君！アルク・スプリングフィールド君！」

「……ハイ？」

「全く、君はまた考え事をしていたのかね？卒業式だというのに変わらないのう……」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニヤは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこちらを見ている。

どうやら校長に何度も名前を呼ばれていたらしい。

考え事をしているとどうにも周囲の音が脳に入ってこなくなってしまうのは悪い癖である。

卒業式という長いようで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが……

ようやく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取り、俺達の卒業式は終わりを迎えた。

ネギ・アーニヤと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。

卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認であろう。

アーニヤはロンドンで占い師、ネギは日本で先生をすることであるう。

恐らくは俺も『英雄の息子』という名のネームバリユーを持っていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであろう。

「ネギ、アルク2人共何てかいてあった？私はロンドンで占い師よ」
案の定アーニヤはロンドンで占い師であった。

「今浮かび上がるところ・・・お？」

ネギがアーニヤに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。

俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がってくる。

『 A T E A C H E R I N J A P A N (日本で先生をすること)』

9

それと同時にネカネさんとアーニヤ2人の「ええ~~~~~」
~~~~~!?」絶叫が廊下に響き渡る。

そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニヤ

「何かのマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です」

「そうよネギったらただでさえチビでボケで・・・」

確かにどう足掻いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良ならなんとかなるだろうとか何とか何とかなってしまおうと思いつつ

「ああ、ネギも日本で先生をすることだったんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒の場所で修行するのもしれないね」

と俺が発言するとネカネさんとアーニヤが若干だが大人しくなる。

前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。

まあ中身が『一子供におじさんと呼ばれる年齢《ハタチ過ぎ》』 + の年齢なのだからできないこともない。

ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかつたりすることとかだ。

魔法を使えば出来ることではあるだろうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだろう。

そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニヤからは特に心配されることもない。実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引っ張られているかのごとく稀にわがまを言ってしまうこともあった。

しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尚も校長に無理だと主張を続ける2人。

「卒業証書にそうかいてあるのなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

ネカネさんとアーニヤの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまう。

そして

「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

と言っ言葉が続く。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと啞然として立っているだけのアーニヤ、そして倒れたネカネさん。

そんな光景が俺の目の前に広がっていた。

ネカネさんも大変だなあ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしている。

今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。

と言っのも、座学の成績は兄弟ともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意とする属性光・風・雷の魔法を使っていたため、ネギが主席で俺が次席という扱いになっている。

俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジェリンとほぼ一緒の得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。

これは今後の布石である。

俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。

しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。

そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでMM元老院や学園長の目をネギに注目させることにしたのである。

ある種の生贄ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思っていたりもする。

が、結局主席・次席なので優秀な英雄の息子達として目をつけられているかもしれないが・・・  
因みに兄弟仲は良好である。

ネギの千の呪文の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるように思えるが、年齢や環境から考察すると致し方ないものであると捉えることができる。

幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯（叔）父・伯（叔）母に預けられて生活していれば尚のこと、離れで子供二人で暮らしているということもかなり影響しているだろう。

そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかった上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかつたことも影響しているであろう。

総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。

あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？

等とは言ってみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるということを確認させてやるだけでもいいのだから。

まあ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その思いが子に届いていなければ無意味なんだ。

そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思っている。

そういえば、ネギはやけに父にご執心だが母について気にしていないのは何故だろうか？

先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になって面倒を見てくれたからであろうか？

そのあたりは追々考えて行くことにしよう。

それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使いになりたい

サウザンド・マスター

と公言していることも上げられる。

俺自身は『立派な魔法使い』<sup>マギステル・マギ</sup>になりたいと思っ  
ていないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている……つもり  
である。

これのお陰で、ネギも俺が千の呪文の魔法使い父のような立派な魔法  
使いになりたいものだと認識してくれているようでやりやすい。

そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業  
することが出来たのである。

気がつくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっ  
ていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることに。

……さて、次は日本での目標を考えよう。

麻帆良到着後のイベントを大きくわけると

- 1 ・学年末テスト
  - 2 ・桜通りの吸血鬼
  - 3 ・修学旅行
  - 4 ・悪魔襲来
  - 5 ・学園祭
  - 6 ・魔法世界
- この6つとなる。

とりわけ原作介入ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァン  
ジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろ  
う。

俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジェリンがすきなんだよ・・・

ハーレムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・  
・

まあ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否めないわけだが・・・

方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないようにフォローしていくこととする。

好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺が主<sup>新</sup>い物語の世界になるかもしれない。

その時は、ネギと一緒に俺も成長していけばいいかと考えている。

今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。

そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニヤとネカネさんに見送られてウエー  
ルズをあとにした。

懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立ったのである。

## 1 歩目 イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩

一読戴き、気に入っていただければ幸いです。

感想・アドバイスをありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただくと嬉しいですよ。

5000字〜10000字を目安に作成していきたいと思えます。

R-15 ガールズラブ 残酷な描写タグについては自身の物差と他の方の物差の差を考えて保険としてつけています。

設定小話1主人公の名前の由来・・・

ネギはナギの母音を変えただけだったので、アリカの母音を変えて名前をつけようと思いましたが、アルカとかアリクとかアリスとか残念だったり女の子のような名前ばかり出てきてしまったので、取りあえず『ア』をつけようと思ったら、アルクという名前になりました。

『ア』をつける アルクだ！という思考回路は意味不明なところがあります、決まったんだしいいかな・・・と。

こんな感じです。

今後幾話かはこんな設定小話なども掲載していく予定です。お付き合いただければ嬉しいです。

前作に引き続き読んでくださった方、ありがとうございます。

初めて読んでいただいた方、初めまして。

これからも、このカキモノにお付き合いいただければ嬉しいです。

2 歩目〳日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く〳（前書き）

大幅修正2 歩目です。

前2 歩目は日本到着〳歓迎会終了でしたが、

現2 歩目は麻帆良行き車両内〳学園長室退室までです。

1 1 年1 2 月2 7 日若干修正

## 2歩目〱日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く

早朝に日本に到着し、電車で麻帆良学園都市中央駅を目差す。

何度か乗り継ぎ、埼京線の電車に乗った辺りから学生達の登校時間と重なったらしく、電車にはどんどん学生が乗り込んでくる。

そうこうしているうちに、満員になりギュウギュウと押しつぶされる俺とネギの姿がそこにはあった。

「ネギ、そっちは大丈夫かい？」

「うん、だ、大丈夫だよアルク・・・」

俺は『現実』での経験から平然としていたが、生まれてから今までウェールズで育ったネギにはキツそうである。

「本当に大丈夫かい？ほら、隙間作ったからこっちにおいで。」

本来ならば女性にしてあげることなのだが、ネギがあまりにも不憫なので隙間を作って入れてやる。

気がつくくと、車両の中が俺達兄弟を除いて少女達ばかりになっていた。

曲がりなりにも俺達は日本人から見ると外国人にあたるので、どうにも好奇の目を向けられてしまう。

「僕達どこ行くの？ここから先は中学高校だよ？」

少女達は小学生程の身長しかない俺達がどこに行くのか気になる様子でそんな事をたずねてくる。

「いえ、その・・・ハ、ハックシユン！」

ネギがくしゃみをすると同時につむじ風が巻き起こってスカートがめくれ、それと同時に『次は〽麻帆良学園〽麻帆良学園中央で〽ございませす』日本の電車特有の鼻声アナウンスが流れる。

このアナウンスを聞くと、嗚呼、日本に帰ってきたな・・・と思えてしまうのは気のせいだろうか？等と現実逃避を試してみる。

少女達はつむじ風？だと思ってくれたらしいので安堵する。

しかし、魔法学校時代から魔力の制御について直せと言ってはいるのだが、どうにも直してくれないのは何故だろうか？

電車を降りて、改札から出ると電車内以上に学生の山が見えた。

「わわわ・・・何コレ！？スゴイ人！これが日本の・・・」

「ここは日本の学校の中でも特殊だからね？日本の他の学校も毎朝こんな事になることはない・・・みたいだよ？」

ネギが勘違いしそうだったので訂正しておくが、理解してくれただろうか？

「あーアルク、僕達も遅刻する時間だよ！？初日から遅れたらまずいし、早く行こう！」

その瞬間、高校生顔負けの速度で走りだすネギの背を目に、あの日を思い出しながら追いかける。

ただし、俺は身体強化の魔法を使っていないのでネギのようなスピードで走ることはできないし、する気もないのであるが。

ちなみに、ネギはリュックを背負っているが『物語』のようにガチャガチャ音がなるようなものは入れさせていない。

父の形見である杖だけはどうしても譲ってもらえずに此方が折れた。他の荷物については友人であるタカミチ宅に届くように既に配達済みなので、後日取りに行くだけである。

やっとネギに追いつくと、赤い髪をツインテールにした少女『神楽坂明日菜』にアイアンクローをされており、その傍らには長い艶やかな黒髪の少女『近衛木乃香』が立っていた。

「ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア初等部は前の駅やよ?」

「そう、つまり子供は入ってきちゃいけないの、わかった?」

「は、放してください〜〜〜」

ネギを見て不思議そうに語るこのか、若干イライラしているアスナ、慌てているネギである。

どうやら俺のことには気がついていないようなのでこちらから声を

掛ける。

「弟が何かしましたでしょうか？したようでしたら私も謝りますので一度弟を放してはくれませんか、御姐さん。」

「あ、アルク！助けて！」

「え？うわ、子供がもう一人増えてる・・・」

「僕達どないしたん？もしかしてここに何か用事でもあるん？」

「ええ、私とそちらの弟なんですが、本日よりこの学校の英語科教師として赴任してきたアルク・スプリングフィールドと、そちらの御姐さんが頭を掴んでいるのがネギ・スプリングフィールドと申しまして・・・」  
「え・・・ええー！！！！？」  
「・・・コホン、学園長室に行きたいのですがどのように行けばいいのでしょうか？」

このかの質問に答えたら、アスナに途中で遮られたが驚くのも無理はないので気にしないことにする。

「ほえー？じゃあ君と今アスナが掴んでるネギ君がうちが迎えに行く予定やった新任教師さんなんやなー」

「そつだよーこのか君。」

このかの言葉に答えた声の方を見ると俺達兄弟の友達であるタカミチがいつの間にか近くまで来ていた。

「お、おはようございます！高畑先生！！」

タカミチに挨拶をすると同時にアイアンクローを外してネギが落ちる・・・意識が落ちた訳ではない。

「久しぶりタカミチー！」

「久しぶりですね、タカミチ・・・いや、高畑先生と言った方がいいでしょうか？」

「・・・！？し、知り合い・・・！？」

当然、かなり歳の差があるのでアスナが驚くのも無理はないだろう。

このかはのほほんと聞き入っているし、タカミチは相変わらず笑っている。

ネギは、アスナに対してプンスカしているところか。

「ええ、高畑先生が父の後輩だったらしく、その繋がりでお世話になりました・・・年齢は離れていますけど友人としてもお世話になっていますよ。ハハハ・・・」

「そ、そうなのね・・・ってそんな事より！先生ってどーいうこと！？あんたらみたいなのがキンチョー！！・・・いや、こっちの子はそつでもなさそうかな？」

「いや、その2人とも頭はいいんだ、安心したまえ。それと今日から僕に代わって君達2-Aの担任・担任補佐になってくれるそうだよ」

アスナの疑問に俺が答えると、ガキンチョ扱いされかけたが訂正し

てくれたので良し。

それと同時に笑いながら見ていたタカミチが結構重要なことを言いのけた。

「そ、そんなぁ・・・そつちの子はまだしも、こんな子イヤです。さっきだって・・・いきなり失恋・・・じゃなくて失礼な言葉を私に・・・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言うなー！大体あたしはガキがキラいなよ！あんたみたいは無神経でチビでマメでミジンコで・・・」

どうやら、『物語』の通りにネギがアスナに「失恋の相が〜」と言ってしまったのであろう。

そうでなければ、アスナが不機嫌なわけもなく・・・ネギを貶した言葉を吐いている途中でネギがくしゃみでアスナの制服を吹き飛ばし、俺はそつと羽織っていたコートをアスナの肩にかける。

そこには叫びを上げるアスナとじつと見守るのかとタカミチ、相変わらずプンスカしているネギとどう收拾をつけるべきか悩む俺がいた。

このかにアスナが着れるものを持って来てもらい、アスナが着替えている間にアスナに何を言ったのかネギに聞いてみると

「あの人失恋の相が出てたから教えてあげただけど・・・そして何故か怒ってあんなことされたんだよ。」

これまた『物語』通りではあるが、やはり育った環境が悪かったの  
であろう、これから俺が正しい方向へと導いてやらないと不味いな  
・  
・

「女の人には優しくしなさいってネカネ姉さんに言われただろう？  
ネギは親切にしたつもりかもしれないけど、女性にとって恋愛に關  
しての悪い結果を教えるのは失礼なことだから次からは気をつけよ  
うね？」

「そうなんだ・・・わかったよアルク・・・」

こういった事なら素直に言うことを聞いてくれるのだが

「それと、魔力の制御はまだできてないのかな？あれも直したほう  
がいいと思うんだけど・・・」

「む・・・わかったわかった、それもやっておくから・・・」

魔法関係の話をするとうどうにも聞き分けが悪い。

そういえば、タカミチがいるので先に送っておいた荷物について聞  
いてみる。

「ところで高畑先生、僕達の送った荷物は届いてますか？」

「ああ、ちゃんと届いているよ。後で持っていこうか？」

「そうですね、高畑先生の都合が良ければお願いしたいですね。」

「ハハハ・・・アルク君、タカミチって呼んでくれてもいいんだけどね・・・」

心の中ではタカミチって呼んでるから安心してくれ、タカミチ。

「一応先生をやるんですし、早めに慣れておいた方がいいんですよ。このうのは・・・そうだネギ、これからはタカミチを見かけても先生をつけて呼ぶんだよ？間違っても生徒達の前、特に学校内では呼び捨てにしちゃだめだよ。」

「うん、次から気をつけるよアルク。」

建前を語って、ネギを諭しておくことは忘れない。

そこへ着替えたが若干不機嫌なアスナと先ほどからあまり変わっていないこのかが戻って来たのでタカミチと別れて学園長室へと向かう。

学園長室に入るとぬらりひよん学園長がいた。

『現実』で『物語』を読んでいた時はあまり気にすることも無かったが、実際に目の当たりにすると『ぬらりひよん』と言う言葉が非常にしっくりくる。

アスナはアスナですぐさま困った顔で『ぬらりひよん』を問いただしている。

「学園長先生！一体どういうことなんですか!？」

「まあまあ、アスナちゃんや・・・なるほど、修行のために日本で学校の先生を・・・そりゃまた大変な課題をもちうたのー」

「は、はい、よろしくお願いします」

今現在、『ぬらりひよん』への対応はネギに任せている。

ここで、ネギに対応を任せているのは『物語』の通りに進行させた  
いからである。

ただ、アスナをスルーした上、修行の話をするとは何事かと・・・  
まあ修行の話だけでは魔法に辿り付くなんてことはないであろうか  
ら問題はなさそうではあるが。

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう？今日から3月  
までじゃが・・・もちろんネギ君とアルク君の2人ともじゃよ？」

俺もネギも教育実習をする為の日本のカリキュラムは準備期間に受  
けておいたので抜かりは無い。

「ところでネギ君かアルク君には彼女おるのか？どーじゃな？うち  
の孫娘このかなぞ」

「ややわじいちゃん」

『ぬらりひよん』の話の振りが謎だが、『ぬらりひよん』としては  
このかに魔法を覚えさせたいのであろう。

それに対してこのかは伝家の宝刀？金槌ツツコミを決めているが、

相変わらずのほんとした空気を醸し出している。

「ちょ、ちょっと待つてくださいってば！だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！しかもうちの担任だなんて・・・」

アスナの言葉に『現実』的な意味では頷く。

確かに日本では、子供が先生をするなどといったことは無いに等しいであろう。

「アスナさん・・・でしたっけ？一応私も弟もオックスフォード大学を卒業していますし、日本で教育実習をする為の単位も取得していますので出来ないという事は無いかと思えます。労働基準法でしたっけ？それについては調べていないので詳しくはわかりませんが。」

これは準備期間中に言われたことなのであるが、俺もネギもアーニヤもオックスフォード大学を卒業したことになっている。

推測するにこの世界では、メルディアナ魔法学校はオックスフォード大学の隠されたカレッジでありメルディアナ魔法学校を卒業した生徒全員が表の世界で有名であるオックスフォードの名前を使い、裏の世界であればメルディアナの名前を使うのであろう。

もちろん、オックスフォード大学の卒業証書も貰っている。

あくまで推論であつてもしかしたら、貰った卒業証書は偽造の可能性も残っているのだが・・・

考えて見ると、偽造の可能性のほうが高いような気がしてきたぞ・・・

・？

経歴詐称なんかで捕まったりしたくないのだが・・・

・・・そういえばここは麻帆良であることを忘れていた。

アスナがネギや俺のような子供が先生をするのはおかしいと思っているのは、麻帆良の認識障害結果を『魔法無効化能力<sup>マジックキャンセル</sup>』で無効化しているからではないだろうか。

「・・・君・・・アルク君？聞いてるかの？アルク君や〜？」

どうやら『ぬらりひょん』に呼ばれていたらしい。卒業式の日にも言われたのにこの癖だけは直らない・・・まあ話の最中に考え事をしなければいいのであるが、気になるとどうしても考えてしまうんだ。

俺がこんな状況になるとネギはいつもの通りにあわあわした様子でこちらを見るのだが、このかとアスナはそんな俺の悪癖など知らず不思議そうな顔をしている。

「申し訳ないぬら・・・学園長。もう一度伺ってもよろしいでしょうか？」

思わず『ぬらりひょん』と言いかけてしまった・・・今度から気をつけよう。

しかし、どう見ても『ぬらりひょん』にしか見えなくなって困るんだが・・・『ぬらりひょん』見たことないのに。

『ぬらりひよん』のニュアンスと学園長の雰囲気ですんなり気になつてしまふのだから仕方がない。

「う、うむ・・・ネギ君にも言ったが、アルク君・・・この修行はおそらく大変じゃ。ダメだったら故郷に帰らねばならんし二度とチャンスもないがその覚悟はあるかの？」

『ぬらりひよん』に若干戸惑い気味に覚悟を訊ねられたが、元氣良く返事しておくことにする。

「はい、やらせて戴きます！」

「・・・うむわかった！では今日から早速やつてもらおうかの？指導教員のしずな先生を紹介しよう・・・しずな君」

「はい」

呼ばれた女性教員の胸の谷間に顔を埋めるネギ。

「あら、ごめんなさい。よろしくねネギ君、アルク君」

「あ、はい・・・」

子供相手だし気にしていないのであるうしずな先生と、そのまま挟まれっぱなしで返事をするネギに注意をする。

「よろしくお願ひします、しずな先生。あとネギはさっさと退きなさい。失礼ですよ？」

「う、うん。ごめんなさいしずな先生。」

やはり、こういった事に関しては聞き入れてくれる・・・魔法関係についてはどうすればよいのだろうか。

「わからないことがあったら彼女に聞くといい。そうそう、もう一つ・・・このか、アスナちゃんしばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？アルク君は放課後にまたここに着とくれ。その時に話すからの・・・」

そんな『ぬらりひょん』の言葉に

「げ」

「え”・・・」

「ええよ」

「ええ、わかりました。学園長。」

上からアスナ、ネギ、このか、俺の順で答える。

「もうっそんな何から何まで学園長ーっ！」

「かわえーよこの子」

「ガキはキライなんだってばー！」

「仲良くしなさい」

ちよっとイライラ気味のアスナとむっすりしているネギだったが、

学園長のその一言で場は治まり俺たちが担当する2・Aの教室へと向かうことになったのである。

ちなみに俺が担任で、ネギが担任補佐をすることになっているのはタカミチが言った通りであった。

この采配は魔法学校の成績から鑑みて、魔法使いとして優秀になるであろうネギに魔法使いとしての修行の時間が多く取れるようになるための手段の一つであると考えられる。

こうなる事を予想して、ネギの得意属性魔法を実技で用いて評価を下げておいたのである。

英雄信仰の蔓延る魔法世界の膝元のようなものである魔法学校では回復呪文についても授業はしていたが、派手な攻撃魔法を教えたがる先生や、知りたがる生徒が多かった。

こういった武断主義的な人物が多い中で実技のテストをすればどういった結果になるであろうか？

答えはネギのような制御が多少甘くても、派手で威力も高い魔法を使える生徒ほど評価が高くなるのである。

では、得意属性でもない魔法を使っていた俺はどうなるかというところ、他の生徒に比べれば遥かに高い水準の魔法を行使することができるが、ネギと同じ魔法で制御もそれほど出来ていないし威力も低いのでネギの次の成績になるのである。

魔法学校の先生の目は節穴か？と言う人もいるかもしれないが、どう考えても節穴である。

むしろ、これほど節穴でなければ俺の使った魔法が得意属性ではないことに気付かれてしまっていたかもしれない。

そのおかげで、この結果を得られたのは上々であろう。

「ねえ・・・アルク？僕のほうが成績いいのに、どうして担任補佐なのかな？」

「ネギと私の座学は同じくらいだったろう？それでいて実技はネギの方が優秀だった、それなら実技の練習も多く取れるように仕事の少ない役割をくれたのかもしれないよ？」

「そうなんだ・・・そうしたら、アルクはあんまりまじ・・・練習できないってことなの？」

「そうかもしれないね。」

疑問を浮かべたネギにそう返してやると、何故か嬉しそうになった大方、『立派な魔法使い』に早く近づける等と考えているのである。それが、それは定かではない。

ちなみに、この会話を聞いたアスナとこのかはネギの方が成績が優秀であるということに驚いていたため、ネギが言い出しかけたまじ・・・という言葉には気づいていそうになかったのである。

『物語』とは多少異なった流れになってはいるが、『転生者』の俺がいることだし許容範囲であろう。

そう考えながら俺は4人と2-Aに向かい歩く。

読んでいただきありがとうございます。

1 歩目のように書けているか不安です。

会話についてもコピペが多すぎるので、ネギのいない時のオリジナルストーリー時になんとか出来ればいいかな？と思っています。

設定小話2タイトルの由来

最初は『英雄の息子達』く双子の兄でもネギじゃないくというタイトルでしたが、主人公の名前がアルクになったこと、転生した主人公が『魔法先生ネギま！』のストーリーの流れに沿いながら、話を進めて行くことから、道ストーリーを歩く（進める）と言う意味合いを掛けて『双子の兄が歩く道くネギま！』というタイトルにしました。  
要するにギャグです。

寒い・・・

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。

3 歩目〱麻帆良学園本校女子中等部2・Aを歩く〱 (前書き)

前作2歩目終了まで。

2・A初授業から歓迎会終了まで。

一読でもしていただければ嬉しいです。

11年12月29日修正

前エヴァとの会話から

後千雨との会話に変更

12年1月2日微修正

### 3 歩目〱麻帆良学園本校女子中等部2 - Aを歩く〱

俺の隣にはこのかとしずな先生、先を歩くのはアスナとネギだが2人ともムスツとしている。

どうやらアスナは、先ほどの失恋のことやタカミチに代わって担任・  
・といっても補佐なのだが、それをされるのが気に食わさそうな様子だ。

それに対してネギは女性に対してしてはいけないことであつたと理解はしても、怒られたことに納得がいかないようである。

「あんだなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！じゃあ私先行きますから先生！！」

アスナは突然怒鳴つてこのかと一緒に教室へ向かつたようである。

「何ですかあの人は？」

「ウフフ・・・あの子はいつも元気だからね、でもいい子よ・・・それと、ハイ、コレクラス名簿よアルク君。授業の方は大丈夫かしら？」

「ええ、一応高畑先生から事前にどの辺りまでやっているか伺つてますし、授業計画も高畑先生が作ったものを引き継いでやらせていただくかと。」

むっすりしたネギの言葉に答えるしずな先生。

確かにアスナの元気のよさは声とか動きとかでわかるけど、言葉遣いとかが訂正なくていいのかな？なんて思いながら、それに続いたしずな先生の言葉に抜かりなく準備しておいたと返しておく。

本来なら、事前準備期間に少し早めに着て顔合わせであったり、授業計画の引継ぎであったりをするべきなのであるが、ほぼ『物語』通りに動きたいのでこれで良しとしておくことに。

まあ、準備期間中に引継ぎが出来るように授業計画などもパソコンを使ってデータを貰ったりしたが・・・これって本当は駄目なことだけ。

「あ・・・う・・・ちょ、ちょっと緊張してきました。」

「ほら、ここがあなた達のクラスよ」

緊張で身体を固めて同じ方の手足が動いてロボットのようなネギともう慣れているであろうしずな先生の差はよくわかる。

どうやら2・Aの教室前に到着したようだ。

「早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね？」

「あうっ・・・」

俺には『物語』の知識もあるので実際に顔を見れば直に覚えられるであろう・・・他クラスについては自信はないのであるが。

どうやらネギは自信がなさそうであるので

「ああネギ、私は今クラス名簿を見て大体覚えたから、これはネギ

が持ってるといいよ。」

クラス名簿を渡すと、幾許かそれを眺めて何かを考える素振りを見せたと思いきや急に顔を上げて、扉をノックして教室に入っていた。

不味いと思ってても既に遅く、黒板消しトラップが目の前でふわりと浮いてしまったが、即座に身体強化の魔法を掛けて黒板消しを思いっきり叩き落とす。

本当は弾くつもりだったのだが、いかんせん急なことだったのでついやってしまった。

「ゴホツゴホツ・・・ひ、酷いよアルク・・・」

「ごめんごめん、ほらこのハンカチで顔ふいて・・・私が先に入るから、少し待ってなさい。しずな先生もそこにいてくださいね？」

第一印象が最悪になりそうだが、やってしまったものは仕方がないのと、ネギが一瞬黒板消しを浮かしてしまった教室内のざわつきを別の事柄に意識をずらすことで忘れさせようという魂胆である。

なので足元を良く見て、ロープを思い切り蹴り飛ばしてやると、今度は目の前に水の入ったバケツが落ちてきて、その先にさらに吸盤の着いた矢が飛んできた。

「・・・はい、まずは自己紹介を・・・と思いましたけど・・・これを仕掛けた人は正直に手を上げてくださいね。」

笑顔を浮かべながら生徒達を見回して言いのけたのだが、起こった

出来事が予想とは違っていたのか、それとも俺に驚いているのかよくわからない表情で口をぽかんと開けている。

「ああ、それともう大丈夫みたいなので後ろから回って入ってきてください、ネギ先生、しずな先生。あと、掃除用具は何処にありますか？誰か持ってきてください。」

「えーっ子供!？」

「てつきり新任の先生かと思って」

どうやら俺の様な子供が指示を出していることは無視するようだ。

しかし、『長谷川千雨』は周囲の状況に青筋を額に浮かべながらモップを持ってきてくれたようである。

「ありがとうございます・・・長谷川さんですね？よろしく」

「お、おう・・・?」

取り敢えず水浸しになった床を掃除しながら

「ああ、しずな先生、これは私が片付けておきますから取り敢えず全員席につかせて、先にネギ先生に自己紹介させてください。」  
「  
と言っておく。」

ちなみに千雨はもう一本モップを持ってきていたので手伝ってくれている。

それを聞いてしずな先生は手をパンパンと叩いて生徒達を座らせている間に片づけを済ませる。

俺が千雨にお礼を言って、席に戻ったのを確認したしずな先生はネギに自己紹介を促すと、どきまぎしながらネギが自己紹介をする。

「ええと・・・あ・・・あの・・・ボク・・・ボク・・・今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願ひします。」

若干間違いが含まれているので訂正しつつ、俺も自己紹介をする。

「それと、私がアルク・スプリングフィールドです。ネギ先生と一緒に英語を教えることになっていて、3学期の期間は教育実習ということなので、よろしくお願ひしますね。」

・・・？反応が無い？やけに生徒達が静かだと思ったが、かなりタメの時間が必要だったらしく

「・・・キヤアツァー！かわいいい~~~~~」  
「~~~~~」  
とクラスの殆どの人間がネギに向かって走り出す。

俺の方には落ち着いてそれを見守るタイプの人 came たので、それはそれでよかったが・・・やはり俺は可愛げがないのであろうか？まあ中身は彼女らよりも年上ではあるので仕方がないことではあるが。

その間、ネギが揉みくちやにされて質問されていたので

「ハイハイ、落ち着いて。質問ならちゃんと受けますから一旦席に戻ってください。」

と言うと、殆どの生徒が渋々ながら席に戻った。

一応教師として赴任してきたわけだし、俺が厳しくしておいて『物

語』のように甘い部分はネギに任せれば丁度いい役割分担になるだろう。

「さて時間も押していますし、誰かまとめて質問してくれる人はいますか？質問してくれる人は挙手をして、最大5点程でお願いしますね。」

挙手したのは『朝倉和美』だったので指名することにする、と言っても朝倉がメモでまとめて新聞にでもしようという魂胆を付狙っただけであるが。

「出席番号2番朝倉和美だよ！よろしく。それで質問なんだけど、2人の年齢と間柄、出身地に学歴・・・それからウチのクラスで彼女にするなら誰がいいか教えて欲しいかな？」

これも予想済みなので、先の4点には俺が答えておく。

「私とネギ先生は双子の兄弟です」  
と答えると教室がざわついたが、初めて俺達を見た人はこう言ったら大抵がこんな反応をする。

「2人共9歳でイギリスのウェールズ出身、そしてオックスフォード大学を卒業していますね。・・・最後の質問については・・・ネギはどう思う？」

生徒達の大多数に今のところ人気がありそうなのはネギなので、ネギのキレイな答えに期待しておく。

「えっと・・・うーん・・・そうですね・・・皆さんお綺麗ですよ」

そうやって笑顔を振りまくネギは、天然ジゴロと言っのだろうか？  
また黄色い声が上がっているので、手を叩いて静かにさせる。

「と、いうことですので。質問は以上で締め切りますがいいですか？朝倉さん。」

「もう少し・・・いや、大丈夫かな？ありがとうございます」

まだ、質問したいような表情をした朝倉に笑みを向けると少し顔を赤らめて引いてくれた。

「他に質問があれば、授業後でも放課後でも私かネギ先生を捕まえてくれれば答えますから、それでいいですか？ネギ先生」

「う、うん・・・それで大丈夫だよ・・・アルク。」

なんとも頼りないが、この歳で教師として働くには経験が足りないし無理も無いであろう。

これからゆつくりと慣れさせればいいだけである。

「それじゃあ授業を始めますか、基本的に進行はネギ先生がするので、わからないことや質問があれば無言で挙手してください。私が行きますので・・・」

そして授業開始直後、黒板の上の部分に授業内容を書こうと背伸びして生まれたての小鹿のようにプルプルしているネギがクスクス笑われたこと以外は問題なく授業を進めることができた。

教壇の前から後ろへ移動する際、誰かの視線を感じた気がするが・・・  
・気のせいだろう。

先ほどイタズラを仕掛けたであろう鳴滝姉妹＋美空は名乗り出てこなかった。なので重点的に当てる懲らしめておく。

『物語』のように授業が進まないといったこともなく、授業を終えて廊下に出ると丁度タカミチが様子を見にきたところであった。

「ネギ先生、アルク先生初授業はどうでしたか？」

「タカミチ・・・先生ボクちゃんと授業できたよ。」

ネギが喜び勇んだように言うので

「そうですね、黒板の上の方に手が届いてなくて笑われてたけど、それ以外は出来たね。」

ネギをからかうのにタカミチに先ほどのことを教えてみると、ネギは頬を膨らましてむーっとする。

「ハハハ、ネギ先生の身長ならしかたないよ。アルク先生がやってもそうだっただろう？」

タカミチがネギをフォローするように俺に話を振ってくれる。

「そっだよネギ先生、私がやっても身長が同じくらいなんだから台か何かがないと、必然的に私もあんなふうになってたと思うよ。」

それ以外にも、クラスの雰囲気や授業風景はどんなものだったか等を少し話して俺達2人は次のクラスへ、タカミチは職員室へ戻っていった。

他のクラスでは2 - A程騒がしくならなかったが、やはり似たような質問はされる。

それでも授業開始をすれば大人しいものだったので、2 - Aは特殊なクラスだと思えた。

別クラスの授業も滞りなく終わり、ようやく放課後になる。

俺は学園長室へ行く必要があったので、ネギと別れて学園長室へと向かう。

学園長室の扉をノックすると『ぬらりひょん』から「入ってもいいよ」と声がかかったので入室すると、中には『ぬらりひょん』以外に1人の少女と1人の女s・・・2人の少女が立っている。

『龍宮真名』と『桜咲刹那』である。

『ぬらりひょん』が言葉に出す前に、・・・嗚呼・・・この2人の部屋で生活しろと言うのだろうなと予測が立ってしまうのが悲しいところである。

では何故この2人が候補に上がるかを考えると、この2人以外に適任者が見当たらないのである。

前提条件として、ネギがこのかとアスナと同室になることに魔法先生たちの反感を買っていることが挙げられる。

それを踏まえた上で、エヴァに任せるかと言われれば呪いを解除す

るためにその日に血を吸われて死んでしまつかもしれないし、何より魔法先生方の自称『立派な魔法使い』を指摘している方々の反感を買う。

かといって、ネギのようにこのかとアスナのような一般生徒と同室にしようものなら、魔法秘匿の関係上同じく反感を買う事になるだろう。

どちらの手法をとっても、火に油を注ぐようなものである。

そうなってくると、必然的に裏関係者であるこの2人と同室にしたほうがこれ以上の反感を抱かれることもなく、すんなりと話も通りそうである。

例え、前提条件がなかったとしても、ネギも俺も一般生徒と同室にしていれば、何らかの異議は唱えられるであろうことからこの2人が最有力候補となるのだ。

では何故、ネギがこの2人のところではなく俺なのかというのは、俺の知るところではない。

「さて、朝は2人がいなかったから紹介できなかったんじゃが、アルク君のクラスの生徒である龍宮真名君と桜咲刹那君じゃ。アルク君はこの2人のところに泊めてもらってはくれぬかの？」

『ぬらりひょん』から何食わぬ顔でそう言われる。

予想していたことではあるが、2人はあまり動じていないようなので「ええ、私は構わないですが、お二方はよろしいのですか？」と聞いてみるが、2人は平然としたまま

「ああ、私も刹那も大丈夫だよ。なあ、刹那？」

「・・・ええ、大丈夫です。問題ありません。」  
と答える。

「・・・それじゃあよろしくお願いしますね、龍宮さん、桜咲さん」

こつもすんなりとOKがもらえるとは・・・龍宮は仕事として報酬を貰っていいそうではあるのでわからなくもないが、刹那はどういうことなんだろうか？もしかしたら、俺の容姿が原因だろうか・・・？

それも後々わかるだろうから気にしないことにする。

「それじゃ、アルク君のことよろしく頼むぞい？2人共。」

「はい」

俺を心配して頼んでいるのか、暗に俺を押さえつけておけと言っているのかわからない、食えぬ『ぬらりひょん』である。

できれば前者であることを祈りつつ、2人と一緒に学園長室を退室すると龍宮が

「この後時間はあるかい？ウチのクラスでアルク先生とネギ先生の歓迎会をするみたいなんだが。ああ、勿論部屋にはそれが終わったら案内するが・・・参加しないと云うのであれば、今すぐ向かってもいいし、用事があるのなら付き合っよ・・・報酬はもらうけど。」

最後にボソつと言った言葉は聞こえてます龍宮さん・・・

この後には予定などは全く無かったので

「いえ、特に予定も入っていないので是非参加させていただきま  
よ。」

と了承の旨を伝えて2・Aの教室へと向かうことにする。

龍宮とは少し話せたが、刹那とはあまり話せなかったというか、無  
言のプレッシャーに負けて言葉が出ない俺がそこにいたのだ。

教室に入るとクラッカーの音と共に「ううこそ、アルク先生ー  
ッ」「と言葉が貰え、今朝はあんな調子だったけれど歓迎はされ  
ているようで少し安心した。

ネギはどうやら先に来ていたらしく、生徒に混ざってクラッカーを  
鳴らしていたようであった。

こういうのは実は苦手なので、隅のほうでゆっくりしようと思っ  
たが真ん中に座っていたネギの隣に座らされる。

周囲を生徒達に囲まれて、逃げられなかったので会話半分周りを眺  
めているとネギの方へのどかがやってきて

「危ない所を助けていただいて・・・その・・・あの・・・これは  
お礼です・・・図書券・・・」

どうやらネギは『物語』の通り、のどかを助けたようである。

そこに今度はあやかがやってきて、ネギの銅像を渡そうとしていた  
ところにアスナがつかつかかって喧嘩を始める。

丁度いいので俺は席を離れて教室の隅に向かい壁に背を預けて窓の  
外を眺める。

そして、教室内の喧騒を見ながら『超鈴音』と『四葉五月』が作っ

たという特製中華まんをほおばった。

・・・美味しい、もう一個・・・少しニヘラと笑ってしまっ。

「ア、アルク君、今朝できなかった質問があるんだけど、質問してもいいかな？」

そこへ若干頬を赤くした朝倉が質問に来る。

「何ですか朝倉さん？」

「今朝双子の兄弟って聞いたけど、似てないのはどうしてかなーって思っ。

俺とネギの容姿は全く違い、ネギはナギに似ているのに対して俺はアリカにそっくりなのだが、髪の色と目の色がどちらにも似つかない。

二卵性双生児と言えはわかるだろうか？似ている双子というのは一卵性双生児が多いのだが、容姿が異なったり、性別が違ったりする双子は二卵性双生児なのである。

本当に兄弟なのかと自身を疑ったこともあるが、2人揃って預けられたこと、アリカに似ていること、魔力の保有量からナギとアリカの子で間違いはないだろう、そう結論付けることにした。

「私たちは二卵性双生児でネギが父に私が母に似たようです。今朝みたいに双子だっって言うと、私達2人を初めて見た人たちって大體驚かれるんですね。」

「へえ、そうなんだ。教えてくれてありがと、また何か質問があったら来るよ。」

朝倉は次のターゲットであろう、しずな先生とタカミチの方へと向かうようだ。

今は丁度誰もこちらへ来ないようなので周囲を眺めると、生徒達は各々会話したり、ネギの方へ向かったりしている。

目に入ったのは、というよりも探してしまったのは俺の意中の人である『大河内アキラ』と『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』に『絡繰茶々丸』である。

アキラは『明石裕奈』と『和泉亜子』の2人と一緒に会話をしているようだ。

エヴァはタカミチの近くの席でネギが気になるのかチラチラ見ている・・・父親であるナギに似ているのもあるだろうし、若干妬けるが気にしてはいけない。

茶々丸はエヴァの近くに付き従っている。

他の生徒達も各々に会話したり、タカミチやネギの所へ行つて会話をしている。

どうやらアスナがネギに読心術をするようにけしかけたらしく、ネギがタカミチの額に手を当てて会話を始めているようだ。

『物語』通りの行動だなと思いつながらそれを見ていると、俺の方へ千雨が寄ってくる。

「先生は・・・本当に9歳なんですか？」

非常に現実的な考えを持つ千雨にはやはり、俺やネギは異物イレギュラーでしかないのだろう。

「ええ、本当に9歳ですよ？大学も卒業してますけどね・・・。」

千雨は俺の答えに若干顔をひくつかせながらも、何とか理解しようとしているのか難しい顔をしている。

「外国では飛び級があるというのは聞いたことがありますけど・・・それじゃあ先生は何で先生をしようと思ったんですか？」

尤もらしい質問である・・・が、ふと考えて見ると自分は何故先生をやっているのだろうか？という疑問が浮かび上がってきた。

「・・・そう・・・ですね・・・。」

俺は言いよどんでしまう。

何故、俺は今この場所で教師という職務についているのだろうか？

『立派な魔法使い』になるためか？否、それは俺の考えでは絶対に有り得ないだろう。

では、ここが『物語』でその流れに従って動いてきたからか？是、イレギュラー『転生者』という存在はあれど俺の知っている『物語』の登場人物が出てくる世界で『前世現実』の記憶もある。

ならば『物語』は夢であると考えて、いつか目が覚めるまでそんな夢を見続ければいいとでも言うのだろうか？否、これは『現実』<sup>リアル</sup>だ。だが、『現実』<sup>今</sup>が『現実』<sup>リアル</sup>であると認めてしまうのであれば、『俺』は本当の意味で『転生者』<sup>イレギュラー</sup>になってしまっているのである。

それを認めるのが怖くて、『現実』<sup>今</sup>から目を背けて、『ネギが主役の物語』<sup>作</sup>に縋り付いて生きてきたのだ。

『ネギの傍でただ見守り、一緒に行動するだけの兄』という『役割』を自らに与えて誤魔化してきたのである。

本当は村にいる頃からここが『現実』<sup>リアル</sup>だということには気づいていたのだが、あの日から今まで逃げ出していたのかもしれない。

『現実』<sup>今</sup>から逃げ出したまま、本当に生徒達と向き合っていくことが出来るだろうか？・・・わからない。

仮初の向き合いは可能かもしれないが、本当の意味で向き合っていくことは不可能だろう。

自身と向き合っていない人間が他者と向き合うことはほぼできないのだから。

『俺』と向き合って、『現実』<sup>今</sup>を認め、『現実』<sup>前世</sup>と別れて、『アルク・スプリングフィールド』を始めよう。

『前世』は在ったモノで、『現実』<sup>今</sup>ではないのだから。

では、『俺』の目的は何か？卒業後の修行先がたまたま日本で先生

をすることだったから、やる以上はそれなりにやるといのが『今までの俺』として、『これからの俺』の目的はなんなのだろうか。

それはスタン爺さんを筆頭とした村人達の石化の解呪だ。

あの日俺の目の前で起きた出来事は、『物語』とは違ってしまった。

そのせいか、ネギは村人達の石化の解呪に対する意識が殆どない状態であり、また自身でも世話になった彼らを助けたいという気持ちもあるので、俺のこれからの目標である。

では、それを達成した後はどうするのか？ということになるが、前から公言している『千の呪文の魔法使い』を目指したいと考えている。

『現実』は腐っていた魔法学校時代にネギと共に兎に角攻撃魔法ばかりを勉強してしまい、攻撃＞防御＞回復・補助という感じになっているが、今後エヴァやアルビレオに弟子入りして全体的な強化をしようと思う。

これは、石化の解呪への道を歩く為には必要なことであると考えている。

『物語』の知識から考えると、この世界には石化の解呪に関しての手がかりは薄そうである。

ならば魔法世界はどうか？可能性はあるだろうが、現時点での俺の力はネギと同程度でしかない。

つまり、今から行くにしても自らを守る術を学ばなくてはならない。

自身の容姿を鑑みても、その必要はあるだろう。

ふと、誰かの声がする。

「……先生……大丈夫か？」

……長い間を置いてしまい、千雨が怪訝そうな顔で俺に訊ねる。

「ああ、すいません……私が先生をしているのは、目標を達成する為の一つの道なのです。」

今度ははっきりと答える。

これが正しいのか間違っているのかはわからないが、今はこれでいいのかもしれない。

「……そうですね。まだ少し納得できないけど、納得しておきます。」

「いえ、ありがとうございます。」

千雨のおかげで自分の大切なことを考えられた気がする。

「突然何ですか？まあ、これからよろしくお願いしますよ、アルク先生。」

そう言って去っていく千雨の後ろに、顔を赤くしたネギとアスナ、その他数名の生徒達が教室に入ってくるのが見える。

どうやら、アスナのネギに対するイタズラシーンが終わったようで時間も時間、解散するようだ。

もう少し、生徒と交流すべきであったろうがそれも今後やっていけばいいだろう。

龍宮・刹那の2人に合流して女子寮に向かう。

「そういえば、夕飯はいつもどうしているのですか？」

隣にいる龍宮に聞いてみる。

「普段は簡単なものを作って食べるか、買ってきたものを食べるかくらいだな。」

龍宮の言葉に刹那も頷いている。

「そうですね、夕飯は私が作るうかと思うのですが、食べますか？」

これから一緒にすごすのだし、何故か得意な料理を披露しよう。

そして、女子寮に戻る前に夕飯の買出しをして女子寮へと向かったのである。

### 3 歩目く麻帆良学園本校女子中等部2 - Aを歩くく

(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

1 歩目のように書けているかまだ不安です。

話が急展開すぎるかもしれませんし。

あの日についてはネギと同じ時に書きたいなと思っています。

あとは文末がなんだか情けない感じか・・・？

#### 設定小話3 アルク転生前

アルクの転生前の個体は今も生きていて、普通に生活しています。

年齢は20代ですが、考え方はまだ幼いです。

また、自分でやる分には強くてニューゲーム(2周目)は好きですが強いニューゲーム(最初から最強)はあまり好きじゃないタイプです。

感想・アドバイスありましたら是非。

誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただくと嬉しいです。

指摘いただいた部分を大幅修正しましたが、相手が変わってかつ何気ない質問からこんなことを考える主人公の思考回路は狂ったままです。

というか力技というべきか、微妙な感じですね。

この辺りは気にしないでいただければありがたいのですが・・・  
こういった設定等ももっと詰め込まなくてはいいけませんね。

反省。

**4 歩目〱麻帆良学園本校女子中等部を歩く〱（前書き）**

前作3歩目を大幅修正しました。

展開が全く別モノになっています。

少し短くなっています。

一読していただけると嬉しいです。

11年12月27日若干修正

#### 4 歩目〱麻帆良学園本校女子中等部を歩く〱

麻帆良に来てからはや6日、授業をすることにも慣れ始め、その他業務にもようやく慣れ始めたところである。

龍宮と刹那と一緒に生活するのも慣れ始めたので、何故すんなりと俺を受け入れたのか刹那に聞いてみたら

「ええ・・・その・・・なんと言いますか・・・その白い髪と赤い瞳に親近感を・・・いえ・・・なんとなく・・・です・・・」  
との答えが返ってきた。

一応、先天性白皮病<sup>アルビノ</sup>じゃないんだけどな・・・と思いつつも、刹那が白髪赤目の烏族のハーフであるのは知識であり、本人にもらすべきことではない。

「ああ、そうなんですな・・・ありがとうございます」

この答えが精一杯だった。

気まづくなったので、夕飯を少し豪華にして誤魔化してみたりしたのは内緒の話である。

また、ネギがこの6日間の中で魔法薬<sup>ホレ</sup>を作ったり、風呂に入っておらずにアスナに大浴場に連れられていたことを刹那と龍宮から聞いた。

流石に、教育実習をしている以上、四六時中ネギについてはおれず仕事をしてしまうのは日本人の性であると俺は思っている。

今は立派な？イギリス人であるけれども・・・

なので目が離れている隙に『原作』通りの行動をされることもあるが、いかんせん俺は万能ではないので出来ないことだってある。

ちなみに、ネギがホレ薬をアスナに飲まされてしまった日の深夜、ふと目が覚めると

「このちゃんが・・・このちゃんが・・・ネギ先生に取られてもうた・・・うう・・・このちゃん・・・守れなくてごめんな・・・うう・・・」

といった、悲壮感溢れんばかりの刹那の寝言が聞こえてきたりもした。

翌日の刹那の弁当には少しばかりデザートを多めに入れておいたので、喜んで貰えただろう。

そして昨日は、ネギがバカ五人衆レンジャーことアスナ・『綾瀬夕映』・『佐々木まき絵』・『古菲』・『長瀬楓』の居残り授業をしたらしい。

居残り授業をするという『原作』知識はあったが、昨日も普通に仕事をして、帰宅していたのだ。

今朝、来たときにこの居残り授業があったことに啞然とした。

最後まで残ったであろうアスナがタカミチの言葉を聞いて逃げ出し、それを杖で追いかけたであろう。

昼休みになり、職員室でネギに昨日の話しを聞いてみる。

「・・・ネギ先生、どうして私も参加させなかったのですか？」

ネギが俺に居残り授業をすることを報告しなかった、これが一番の疑問だ。

報告・連絡・相談、社会人として当然のことらしいが、『前世』でも『現実』でも、出来ているかはわからないので強くは言えない。

「ボ、ボクも最初はアルクを呼ぼうと思ったんだけど・・・居残り授業対象者の教えてくれたしずな先生に『学園長がネギ君1人でやるように』言われたって・・・」

俺の迫力？に若干どもりながら答えるネギ曰く『ぬらりひょん』が原因らしい。

「そうなんだ？ちょっと学園長に問い合わせてくるよ。」

しかし、何故ネギのみでやらせようとしたのだろうか？

教育実習における生徒の見えない作業は殆ど俺がやって、ネギには生徒の前で授業をさせるといふ手法を取っているのだが・・・

『前世』での教育活動は行ったことがなく、俺自身も初めての体験だったがこれを全て9歳の子供が出来るかと言えば微妙である。

社会に出たのだからと言われれば、何も言えなくなるが・・・やってみれば『原作』で一般教諭にも多少甘く見てもらえていてもおかしくはない仕事量である。

兎に角、どうして1人で居残り授業をさせようとしたのか『ぬらりひょん』を問いたたださなくてはならないと思い、俺は学園長室へと

向かう。

学園長室に入って直に『ぬらりひょん』に疑問を投げかけてみる。

「学園長、何故ネギ先生1人で居残り授業をさせたのですか？私とネギ先生の2人じゃないと現状1人では授業など出来ないと思うのですが？」

「……うむ、それはそうなんじゃがの……アルク君はちいとばかりし仕事のしすぎじゃないかね？一般の先生方から抗議されたんじやよ。あまりにもネギ君の仕事量が少なすぎるとな。」

渋々ながら『ぬらりひょん』が答える。

「……？俺は中身がアレなので問題はないが、ネギに関してはまだ9歳だし問題ないのでは？」『ぬらりひょん』の答えに考えるが

「職員室での仕事は殆どアルク君がしとるじゃろ？その上ネギ君は先に帰ってしまい、初日から4日間残って仕事をしているのはアルク君じゃったと。同じ年であるネギ君とアルク君の仕事量に差がありすぎたということじゃ。元々高畑君も2人にやってもらおうと考えていたそうなんじゃが、こう抗議をされてしまったてはアルク君に任せるわけにはいかんと思ってるの……」

自身の肉体年齢について失念していたようだ。

確かに俺の中身はもうアレな年齢でそれなりに物事を考えられると思っていたが、やはりまだ甘いようである。

精神的な年齢だけで見れば、俺とネギは約20年もの経験の差があ

るので比較対象にすらならないが、肉体年齢は俺もネギも一緒な上に双子であることから必然的に比べられてしまうのは道理である。

そういえば、魔法学校在学中もネギと俺は比較されていた気がするが・・・俺自身が俺は俺でネギはネギだと思っていたこともあり、全く気にしてなかったような気がしてきた。

「それなの、ネギ君にはもう少し箔をつけてもらわねばならんのだよ・・・」

「・・・それは、どういった意味合いでの事ですか・・・？」

感慨深げに言った『ぬらりひょん』に対して俺はその意味を訊ねる。

返答によつては今後どのように動けば良いかが変わるからである。

「彼は『立派な魔法使い』を目指しておるんじゃない？昨今の若いものが言つとる『立派正義の魔法使い』ではなくのう・・・ならばこの老骨も手助けしたいと思つんじゃないよ。」

『ぬらりひょん』は本心で言っているらしく、そう言つとふと俺から視線を逸らして窓の外を眺める。

「魔法学校の成績を見ての、成績が優秀なネギ君を鍛える為に本来は担任をやってもらおうと思つたんじゃないが、高畑君の意見はアルク君に担任をしてもらいネギ君には担任補佐をしてもらうということじゃったよ。」

どうやら、俺が担任になったのはタカミチの口ぞえがあったかららしい。

「確かにネギ君は魔法使いとしては優秀じゃが、その実は歳相応の子供じゃ。アルク君がおる前でこう言うのも難じゃが、アルク君は歳の割りに大人びておるし、落ち着きもあると。一般の先生方を納得させるのであれば、ネギ君を担任にするよりはアルク君を担任にした方が後のゴタゴタも少なくなるだろうとな。」

正にその通りであるが、自分が大人びていると天狗になることは許されないことではある。

「事実、一般の先生方からは違った意味で抗議が来ておる分この判断は正しかったんじゃろな・・・しかしのう、ネギ君があまり仕事をしていないという事実は不味いんじゃよ。一般的にも、修行的にもじゃ。」

「・・・申し訳ありません・・・」

基本的にネギには甘い俺にも原因はあったようで、何ともいい難い空気になる。

今日はネギに少し仕事を割り振ってみよう・・・

「ではネギ先生にも、もう少し仕事を割り振って仕事の量がある程度均一になるようにしていきます。」

「うむ、それで頼むぞいアルク君。・・・わざわざ来てもらってすまんかったの・・・また何かあったら来るんじゃよ？わしも相談に乗るからの・・・」

案外、『ぬらりひょん』はネギの事を考えていてくれるんだなと俺

は思えた。

今後は『ぬらりひょん』にネギの行動方針を任せても良いかもしれない。

『原作』から考えるといかんせん行動にダメな部分は残る・・・例えば、図書館島のゴーレムであったり、修学旅行の親書であったり・・・が。

ただし、図書館島での一般生徒を巻き込んだネギへの試練はどうにかしたい所ではあるが。

修学旅行の親書については、一般生徒さえ巻き込まなければ問題はないと考えている。

子供のお使い的な感じで親書を届けさせるのはいかなことかと思わなくもないが、そこは『ぬらりひょん』の手腕・責任であり、俺から言えるとすればそれでいいのかと問いただすくらいのことしか出来ないだろう。

まあ、『ぬらりひょん』については見直したが、心内で学園長と呼ぶことはほとんどないであろう。

『ぬらりひょん』だし、何より俺がこの呼称を気に入っているので。

「わかりました・・・ありがとうございます学園長。失礼しました。

」

俺のことも心配してくれているのであろうか？『ぬらりひょん』の言葉尻にそんな感情を感じたような気もしたが、気にせずに学園長

室を後にする。

少しだけ気分がよくなった気がした。

職員室に戻ると、ネギが若干落ち込んでいるような燃えているような複雑な表情をしている。

「あれ、どうかしたのネギ？」

「アルク・・・実はさっきまき絵さん達が怪我したみたいで・・・怪我をさせた人のところまで行くと喧嘩してたんだ。それを止めようとしたけど上手くいかなくて、アスナさんやいいんちよさんが一度は助けてくれたけどまた喧嘩が始まっちゃって・・・そしたら、タカミチ・・・先生が代わりに止めてくれたんだ！」

『原作』の知識があるはずなのに、細かいイベントは殆ど忘れてしまつのは仕方がないことにしたい・・・

そこへ丁度体育の先生がやってくる。

「子供先生たち次の時間授業ある？ちよっと出掛ける用事ができちゃつてさ。次の時間の授業が無ければ2・Aの体育の監督をお願いしたいんだけど・・・大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

急ぎの用事なのか、若干焦り気味な体育の先生に気軽に了承の返事をする。

「それじゃ、頼むよ。あと新田先生には俺が報告しておくからさ。」

ああ、2 - Aの授業は屋上でバレーだからよろしくね。」

もしかすると・・・いや、確実に高等部2 - Dのドッチ部”黒百合”さんが来ているだろうと思いい、屋上の使用クラスを聞いておくことに。」

「はい、そういえば屋上のコートを使用するのは何クラスですか？」

「ん？ちよつと見てみるよ・・・うーん・・・2 - Aだけだけど、どうかしたかい？」

「いえ、大丈夫です。少し気になっただけです・・・。」

どう追い払おうか考えながらネギと共に屋上へ向かおうとしたのだが、新田先生に呼び止められた。

「アルク先生、少しお話したいことがあるんですが？ああ、2 - Aの体育の件でしたらネギ先生だけで十分でしょうから、時間をいただけますかね。」

有無を言わさぬこの迫力、流石『鬼の新田』と言われるだけはある。

「ええ、構いません。それじゃ、ネギよろしく。」

「うん、わかったよアルク。失礼します新田先生！」

そして新田先生と話をしたのだが先ほど『ぬらりひよん』に言われた通り、ネギと俺の仕事量の差について直接注意される。

教育実習というのは、2〜4週間を目安に行われるものであり、そ

の短い期間の中で教員として必要な事を学ぶものなのではあるため、高々4日間だとしても、期間から考えるとほぼ1週間なのである。

今回は1ヶ月強の教育実習期間が設けられているものの、その中の1週間でこつも仕事量に差がついてしまうと、ネギが教師として必要な技能及び知識をつけるのを遅らせている状態になっていたのである。

それでは、実習期間が実習期間として成り立たなくなり、実習十分となつて一般的にも、魔法使いの修行としても良くない結果になつてしまつのである。

もっとゆっくり慣れさせていけばいいと思つていたのだが、考えが甘かつたようである。

『原作』知識として、ネギはしずな先生からなんとか合格点を貰つて最終課題に臨んでいたのだが、今の状態ではどうなるかわからないだろう。

新田先生からこのように言われているのであれば、もしかするとしずな先生から合格点が貰えずに最終課題に臨めなくなり、俺の知らぬうちに『原作』から完全に乖離させることになっていたかもしれない。

それは俺の望むところではないので、今日からでもネギの仕事量を増やさなくてはならないだろう。

それ以外にも、ネギ程になれとは言わないが歳相応に生徒達と触れ合ったらどうだとか、もう少し新田先生を頼つてもいいんだよとか、

色々と言われて、話が終わる頃には授業の終わりそうな頃合となり、

新田先生から解放され、俺は屋上へと向かう。

屋上に出るドアの前にはタカミチとしずな先生がいたので、今頃ネギはクラスメイト達に胴上げされていることだろう。

俺はそつと職員室へと戻り紅茶を淹れて、冷めるのを待っているとネギが戻ってきた。

何故かスーツ姿ではなく、体操服姿であるのがシユールである。

前の時間に授業がなかった女性教師の中にはネギの姿を見て悶え苦しんでいる？人もいるようである・・・それでいいのか・・・？

「お疲れ様、ネギ、今日は私の代わりに明日の授業計画を立ててくれないかな？ちょっと早めに帰らないといけない用事ができたから。」

「うん、わかった。やっておくから教えてくれる？」

やはり、こういう所は素直に聞いてくれるのでありがたい。

この調子で仕事をやって貰えばなんとかなるであろう、そう楽観しながら、今日の仕事を片付けた。

#### 4 歩目〱麻帆良学園本校女子中等部を歩く〱（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

何かに振り回されている気がしてきた・・・

設定小話4アルク転生前その2

実は彼はテンプレを体験しています。しかし3つの願いを用いてテンプレした記憶を消し、髪と瞳の色を決め、強力すぎる能力を除いたある人物の経験と能力を望んで転生しました。

なので自称転生者だったり、得意でもなかったことが得意になっています。

アドバイスがありましたら是非。

誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

5 歩目↳麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編↳(前書き)

前作4歩目前半部分です。

書き直して見ると如何に詰め込みすぎたかがよくわかりました。  
反省。

一読していただけると嬉しいです。

11年12月27日若干修正

5 歩目↳麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編↳

ネギに仕事を振り分けるようになってから数日、職員室の皆がネギの飲み込みの早さに驚いている。

仕事を片付けるスピードも9歳とは思えぬスピードで、現役教師も吃驚のようだ。

何せ、あの新田先生すらも驚いているくらいなのだから。

もちろん、俺も初日にネギ並みのスピードで仕事を片付けていたのに驚かれてはいたのであるが。

先日は楽観していたが、この様子であればきっと大丈夫だと思う・・・  
・思いたい。

この数日は新田先生や『ぬらりひょん』からのお話通り、俺の仕事量とネギの仕事量が同程度になるようにしているので、新田先生から呼び出されたり、『ぬらりひょん』に呼び出されたりすることもない。

そういえば、もうすぐ学年末試験1週間前なのだが2・Aは普段通りなのに対して、他のクラスはピリピリとした表情を持って授業に臨んでいる。

こんな状態だったのに『原作』のネギは気がついていなかったのかと思うと情けない限りである。

現に、俺の隣にいるネギも指導教員であるしな先生から来週学年

末試験があると教えられたはずなのにあまり気にしていないようだ。しかし、『ぬらりひょん』は『原作』のように『期末試験で2・Aを最下位から脱出させたら正式に先生にしてあげる』という最終課題を出してくるのであるのか？

それはもうすぐ解ることだろう。

今は丁度昼休みでいつものように隣の机にいるネギに話しかける。

「そういえばネギ、2・Aって前のテストまでずっと全クラス最下位の平均点だったらしいけど知ってたかい？」

「え、そうなのアルク？ボクは知らなかったよ。どうしてだろうね？」

少しだけ2・Aの成績について意識させておいたほうがいいのかもしれないと思い最下位だという事実を話題としてみたが、ネギはのほほんと答える。

「んー・・・バカレンジャーだっけ？居残り組の生徒達、成績を見てみるとあの5人の平均点が著しく低いみたいだからそれが原因みたいだね・・・。」

「そうなんだ・・・でもアスナさんも最近頑張ってるし、他の人たちも頑張ってるから大丈夫だと思うんだけど・・・？」

確かに、このところ居残り授業を何度かやっているようで、ネギ曰く頑張っているそうである。

「ネギ、来週学年末試験なんだけど・・・2 - Aの雰囲気ってどうだったっけ？」

「え？いつもと変わらないけど・・・それがどうしたの？」

「他のクラスは？」

「・・・そういえばピリピリしてるかも。昨日今日は質問に来た生徒も他のクラスの人が多かったし・・・。」

「だろう？2 - Aの生徒で質問に来るといったら、大体宮崎さんくらいだし。これじゃあまた期末試験も最下位になるかもしれないね。」

「そうかな？でも、まだ試験までは日があるし、大丈夫じゃないかな？」

示唆してみたものの、変わらずにのほほんとしているネギ。

これで最終課題が『原作』と同じであったら、慌てて

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います！次の期末テストはもう、すぐそこに迫ってきています！あのっ・・・そのっ・・・実はうちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので、みなさん頑張って猛勉強していきましょー！」

等と言ったりするのであるだろうか？

幸い、『原作』とは違って『俺』がいる上に俺が担任をしているのだから今からでもテスト勉強のやる気を出させておくのも手かもしれない。

それに、例えその日になってネギが慌てても俺がいるんだしそんな事も言えないだろう。

帰りのSHRになり、

「みなさん、来週は学年末テストがあります。今学年最後のテストですし、普段よりも力を入れて取り組んでみてもいいかもしれませんね？」

と当たり障りなく言ってみたのだが、果たして効果は出るのだろうか。

先日の言葉に効果は見られず、2・Aは相変わらずほのぼのとした空気で日々を過ごしているようである。

日直であろう、『椎名桜子』とゆうなが職員室までやってきたのでHRのため2・Aへ向かう途中で先日の俺の言葉を思い出したであろうネギが

「・・・やっぱり他のクラスのみなさんはピリピリしてますね・・・

と呟くと、桜子とゆうながそれに反応する。

「そつだねネギ君。やっぱり学年末テストが近いからかもね。」

「来週の月曜からだよネギ君」

「うちもそつなのに・・・今の調子で大丈夫かな？」

ネギが少しだけ心配になってきたらしく、弱気なことを言うのだが

「あー」

「あはは、うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係ないんだ」

「特に2 - Aはずーっと学年最下位だけど、大丈夫大丈夫」

桜子とゆうなはあつけらかなとしてそんな事を言いのけるので、少し心配になった俺が口を挟む。

「今は関係ないかもしれませんが、高校生になったら関係しますよ？高校の勉強は中学の勉強を基礎にした勉強ですから、今の成績が悪いと高校じゃ留年してしまうかも・・・？」

「んーそうかもしれないけどね？今が大丈夫だったらそれでいいっしょ？アルク君」

「明石さん、学校では先生と呼んでくださいね・・・」

「あ、ごめーん、アルク先生。」

が、これまた予想通りの答えが返ってくる。

中学生で将来のことまで考えて行動できる人間は早々いないであろう。

全くいないわけではないのだが、多くはこのように答えるのではないだろうか。

「まあ、そんなんですけどね。私は大学を受験する際少しばかり苦労したので・・・みなさんもやって置いた方がいいと思うんですけどね・・・」

『前世』での感想を率直に述べるが、こちらでも一応大学卒業扱いなので違和感はないだろう。

「ネギ先生。あの・・・学園長先生がこれをあなたにとって・・・」  
そこへしずな先生がやってきてネギに手に持っている手紙を差し出す。

桜子とゆーなは2人で何か話しているようだ。

「え・・・何ですか深刻な顔をして・・・えっ！？ボクへの最終課題!？」

驚きながらネギが受け取った手紙を開くとそこに『ねぎ君へ 次の期末試験で、二・Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。麻帆良学園学園長 近衛 近右衛門』と書かれた1枚の紙が入っている。

『原作』通りの展開であり、どうしようかな・・・とっているとふと、あることに気がつく。

ネギの名前だけで俺の名前が無いのだ。

「しずな先生・・・学園長先生は私には何か渡したり、伝えたりするようには言っていないかったですか？」

「アルク先生にもコレが・・・」

気になって、ネギの最終課題に驚いて身を固めているしずな先生に聞いてみるとネギと同じような封筒に入った手紙を渡されるので中を確認すると、ネギと同じく一枚の紙が入っている。「あるく君へ今日の授業が終わったら学園長室に来る様に。大事なお話があるんじゃないよ。麻帆良学園学園長 近衛 近右衛門」と書かれていた。

ネギと違う・・・？どういうことなのだろうか？

「な・・・なーんだ簡単そうじゃないですかーびっくりしたー」

思考も身体も固まっていたネギが再起動したらしく、本来であれば難しいことを簡単だと言いのたまう。

「そ・・・そう？」

それがわかっていているしずな先生は若干驚いているようであるが、ネギ言葉を聞いて2人で話している桜子とゆうながネギの方へ行き、最終課題の書かれた紙を覗き込んでしまう。

「えー？なにになに！？どーしたのネギ君？」

「あーネギ君本物の先生になるんだ!？」

「へーなにになに・・・？」

内容まで確認しようとしているゆうなと桜子に慌てているネギがいるので、俺が代わりに嗜める。

「明石さん、椎名さんそういうモノは勝手に見ては駄目ですよ?」

「はい……」

聞き分けが良いのはいいことだが、ネギが先生になるのであれば俺はどうなのだろう?という疑問が沸くのも当然で不思議そうな顔をしたゆうなが

「あれ?ネギ君が本物の先生になるんだったらアルクく……先生はどうなの?」

聞いてきたが、それは俺にもわからないので

「それは私もまだわからないですよね。」  
と答えるしかない。

「そうなんだー?ま、ネギ君もアルク先生も頑張つてよね!」

ゆうなに応援されるのも悪くはないなと思いつつ、注意をしておく。

「ああ、後この事は他の人たちには口外してはいけませんよ?あとネギ先生も生徒に見られないようにそういったモノは直にしまいましょうね?」

「はい」

「うん、わかったよアルク……」

そして2・Aへ向かう。

「みなさん、本日のHRは学年末テストも近いので勉強会にします。」  
「  
ネギが可愛そうなので、少しでも勉強させる機会を増やしておくことにすると、あやかがすかさず反応する。」

「アルク先生、素晴らしいご提案ですわ」

「はい、提案提案！」

そこに桜子が『原作』通りに提案してきたので一応指名する。

「何でしょう、椎名さん？」

「『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

「「「「「おお〜〜〜っあはは、それだーっ！」「」「」

「な、ちょ！？みなさん！？」

桜子の言葉にクラスメイトの多くが同意を示してざわめくも、あやかは止めようとする。

俺も普段であれば直に却下するのだが、ネギがどのような反応をするか見てみたかったのでネギに振ってみると、ネギは考える素振りを見せるとそれでいいのではないか？という答えが返ってきた。

その答えを聞いて英単語野球拳を始めようとした生徒達を制止する。

時間の無駄ではあるが、ルールも聞かずにそんなことを始めたらど

うなるかがネギに解るようにするために桜子にルールを聞くことにする。

「ふむ、では椎名さんルールを説明してください。私はルールがわからないので、どういったことをするかによつては許可しますよ?」

まあ、中の人の年齢がアレなので野球拳がいかなるものかは知っている。

しかし、外見は9歳なので知っていなくてもおかしくは無い年齢なのである。

「ええと、英単語のスペルを見せてその意味が答えていくゲームで・・・答えられなかったり、間違えたりしたら服を一枚ずつ脱いでいくゲームです・・・。」

若干戸惑い気味に答える桜子だが、ルールは案の定であり

「ネギ先生、このルールで勉強させますか?」

「ううん・・・させないかな・・・。」

ネギは青褪めながら、やらせないと言口にした。

これでルールもわからないことを即座に採用するということなどしないようになってくれればいいのだが・・・

「と言つことで却下します。他に意見はありますか?」

このままではどうしようもないので別の意見を聞いてみるとあやか

が挙手をしたので、指名する。

「でしたら、各自苦手教科の勉強をしたら良いかと思えますわ、アルク先生。」

「そうですね、それが妥当でしょう。成績優秀者の超さん、葉加瀬さん、雪広さんは教える立場に回ってみてください。人にものを教えるということも貴女方には勉強になると思えますので。」

成績優秀な3人には教えることで問題に対して自身が理解できているかを知ってもらうために教える側に回ってもらい、勉強会を開始する。

いつもの如く、アスナがあやかと喧嘩しそうになったりもしたが、それ以外は何事もなく勉強会を終えることができた。

放課後になり、学園長室へ向かう。

ドアをノックすると『ぬらりひょん』から返答があったので入室する。

「失礼します学園長、手紙を頂きましたがご用件は何でしょうか？」

「おお、わざわざ来てもらってすまんの、アルク君。用件なんじやがな、アルク君は4月から正式に英語科教師として修行に励んでもらうことになったんじやよ。」

これは予想外だった、てつきりネギと一緒に最終課題を出されるも

のだと思っていたのだ。

「ありがとうございます……ですが、ネギには最終課題を出されていますけれど、それは？」

「うむ、それなんじゃが……指導教員のしずな君がおるじゃろ？アルク君は文句なしで合格らしいし、一般の先生方からも評判が良くてのう。だがネギ君は……これは内緒じゃぞ？しずな君としては一応合格だそうなんじゃが、一般の先生方には不評でのう……じゃから、居残り勉強組の勉強を見ていたから万年最下位である2 - Aが最下位を脱出したという事実が欲しいんじゃよ。」

「なるほど、そうなんですか……」

あの居残り授業は全教科教えていたのか……あれ？ネギ本当はすごいんじゃないか……？

「まあ、ちいとばかし危ないんで老骨がほんのちよいと手助けするんじゃがの……」

等とボソッと書いていたが俺には聞こえなかったことにする。

大方図書館島の魔法の書の噂と学年最下位のクラスの成績非優秀者は落第という非現実的な噂を流して誘導するのであるう。

「まあ、そういうことじゃからの。アルク君は4月から正式に2 - A……来年度は3 - Aじゃの。の担任をやってもらうから、よろしく頼むぞい？勿論口外はせんようにの。わしからは以上じゃが、アルク君は他に聞きたいことはあるかの？」

「いえ、ありません。」

「なら、戻ってもいいぞい。何かあればまた呼ぶからの。ふおふお  
ふお・・・」

「では、失礼します。」

取り敢えず、今夜は図書館島の前で張り込んで置くか・・・

夜、図書館島の図書館探検部しか知らないと言う秘密の入り口前に  
一人佇む俺がいる。

時間は夜の9時を少し回った所だろうか？夕方、仕事を終えて部屋  
に戻ってから直に図書館島に来たのだが、詳しい場所がわからず  
かなりの時間彷徨った。

かなり冷え込む上に、水溜りもあるので冷たい風が吹いてくる。

正直早く帰りたいのだが、バカレンジャー＋図書館島探検部＋ネギ  
が来るまでの辛抱である。

寒いのは苦手だし、朝は4時半には起きてランニングをしているの  
で部屋に戻ってさっさと眠りたい。

夕飯もまだ食べて無いのですごく空腹なのである。

簡単なものでも作ってくればよかった・・・と後悔したりするがも  
う遅い。

10時を過ぎたあたりでガヤガヤと人がやってくる気配がする。

「さて、こんばんは皆さん。こんな夜遅くにどちらへ行くのですか？」

「な、アルク先生・・・！？」

やってきたのはアスナ・このか・ゆえ・楓・くふえ・まき絵・のどか・『早乙女ハルナ』・ネギと『原作』通りの8人だ。

「もう10時を過ぎていますし、明日も学校があるんですから寮に戻りなさい。貴女達に何かあれば大変なのですから。」

主にネギと俺、だろうか？特にネギに至っては監督不屈きな上に同行という非常に問題な行為になってしまうのである。

まあ、これはバレずにいれば問題にもならないのだが・・・

「・・・わかりました・・・私たちは引き上げます・・・」

ゆえが渋々言っつて全員元来た道を引き返したのを確認して30分程待ち、俺も引き上げる。

寮に戻ると、龍宮も刹那も心配して起きていたようであればよかったのだが、どうやら夕飯が外食だったため満足出来なかったらしい。思っていたこととは違ったが少し嬉しいので、自分の分を作るついでに、軽く食べられるカロリー控えめなものを作って3人で食べる。

その後は、シャワーを浴びて身体を温めて布団に潜り込んで眠った。

5 歩目↳麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・前編↳(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

別の転生ネタばかりがふつてきて困ります。

設定小話5アルク転生前裏話

設定初期段階ではチート能力に制限をつけて次第にその性能を知り、記憶を解放して自身を理解させようと考えていました。

しかし、チート能力は無しにしたいと思い更に制限をかけてみましたが、折角の設定である開発力が無駄になりそうだったので、チート能力の行使をさせないことにしました。

アドバイスがありましたら是非。

誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

6 歩目〱麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・後編〱(前書き)

前作4歩目中盤から終盤まで。

まだ詰め込んでいたり、情景がわかりにくかったりしてますかね？

うーん・・・難しい・・・

一読していただけると嬉しいです。

## 6歩目〱麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・後編〱

俺の朝は早い。

4時に目を覚まし、着替えてランニングして、大体5キロくらい走ったら部屋に戻り、シャワーを浴びて着替える。

着替えが済めば、台所で朝食の準備と弁当の用意して3人で朝食を済ませ、俺だけ一足先に学校へ向かい連絡事項と今日の授業の確認、朝礼をしてクラスのSHRに臨むのだが・・・

昨日は図書館島でバカレンジャー+を待ち伏せしていたので、帰宅が0時を回ったので普段よりも寝ていないため非常に眠い。

眠気覚ましにコーヒを淹れて、他の先生と話しながらSHRが始まる時間まで待っているのだが、時間が迫っているのにネギが来ないのである。

・・・まさかと思っただけ早めに2-Aに向かう。

「「「「え・・・ええ」」」」

2-Aの教室から生徒達の驚きであるう声が聞こえてくる。

「何ですって!?!?2-Aが最下位脱出しないとネギ先生達がクビに」  
「~~~~!?!?ど、どーしてそんな大事なこと言わなかったんですの桜子さん」

「あぶぶっだったって先生に口止めされてたから・・・」

「そうですね、雪広さん落ち着いてください。それと椎名さん・・・それは言わない約束でしたよね・・・？ちよつと後で職員室に来てくださいね・・・。」

教室に入ると桜子とあやかが言い合っていたのでそれを止める為に口を挟み、言葉尻で微笑を浮かべて置くことも忘れない。

それを見て？あやかが鼻血を垂らしているが、それはお約束なので気にしてはいけない。

それよりもネギ先生達？どうして俺も含まれているのか・・・まあ勘違いだろうけど、今訂正する必要もないし放置でいいだろう。

「と、とにかくみなさん！テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ！・・・そのへんの普段真面目にやっつてない方々も！！問題はアスナさん達5人組ですわね・・・取り敢えずテストに出ているだけで0点さえ取らなければ・・・。」

正気を取り戻したあやかが、成績が中の下程度のクラスメイト達を叱咤激励し、バカレンジャーの心配をしているところへ

「みんな！大変だよー！！ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に・・・。」

教室のドアを盛大な音を立てて開けながらハルナとどかが駆け込んでくる。

昨日はしぶしぶながらも引き下がっていたので、大丈夫だと思い込んで帰宅してしまったのが間違이었다ようだ。

「どうやらバカレンジャー + は俺が帰宅した後に、再度図書館島へ突入したらしい。」

「あ、アルク先生・・・」

「・・・え・・・」

俺の姿を見て固まるハルナとのどか、その2人の言葉に固まるクラスメイト達がいるので手を叩いて再起動させるべく言葉をかける。

「はい、みなさん一旦席に着いてください！朝のSHRを始めます。まず、まだ来ていない生徒に関しては連絡を受けていないので、先ほど早乙女さんが言ったように行方不明などということは他のクラスの人に口外しないようにしてください。私が確認を取って何かわかったら伝えますので。」

クラスメイトは一部を除いて落ち着いた（その一部は最初から落ち着いていた）が、ハルナとのどかは最後の言葉に動揺を隠せないようだ。

連絡の取れない生徒から、連絡も来るわけがないので俺はどのように対応すれば良いかを聞きに行くために学園長室へ向かう。

学園長室には相変わらず「ふおふおふお」とのほほんとした空気の『ぬらりひょん』がいた。

「学園長、どうやら2・Aの生徒数名とネギ先生が図書館島に潜りこんでいて学校に来ていないようなのですが、どういった対応を取ればよろしいでしょうか？」

「そうじゃの、潜り込んだ生徒とネギ先生は公欠扱いにするかのう？」

「では、それを補佐した早乙女・宮崎の2名については？」

「その2人については、謹慎処分じゃな。勿論公欠扱いでじゃがの・・・この後直にその2名は学園長室まで来るように伝えて欲しい。」

「空気の割りに返答が早い『ぬらりひょん』・・・俺が来ることは見越していたのだろうか？」

「わかりました・・・ですが、その他の生徒達と比べるといささか不公平だと思いますから、潜り込んだ生徒及び補佐した2名については春休みに補習でもさせてください。成績優秀者も混ざっていますが、そこは学園長の力で何とかしておいてくださいね？」

「・・・ひょ？・・・わかった、そうすることにしようかのう・・・」

『原作』知識から、罰則などについては考えていないであろうと推測して罰則の提案をしてみると、案の定考えていなかったのか『ぬらりひょん』の返答に間がある。

追撃の如く

「ああ、春休みの半分程は補習にしてくださいね？監督はネギ先生で。罰としては軽いでしようが、これくらいはしなくては反省もしないでしょう。」

どれくらいの日数の補習をさせるかを提示すれば

「わ、わかった、そうしておくからの？ほ、他に何か言いたいことはあるかの？」

焦った『ぬらりひょん』がそこにいた。

「いえ、このくらいですね。では失礼します。」

学園長室を後にして2・Aに戻り、ハルナ・のどかを学園長室に行かせてその日の授業は始まった。

2・Aに若干の動揺が広がってはいたようであるが、1日の授業はなんとか終わらせることが出来、放課後のSHRの時間である。

殆どの生徒は「麻帆良だし仕方ない・・・」的な空気を醸し出しているが、一部の生徒は動揺が収まっていないようである。

例えば刹那であれば

「・・・お嬢様が・・・お嬢様が・・・このちゃん・・・このちゃんがあ・・・」

おそらく学園長からこのかは無事な事を教えられているであろうし、図書館島に入るかもしれないことは事前に伝えられていただろうがこの調子であるし、

「・・・いやいや、朝学校に来てたのに学園長室に呼び出し食らってハイ、公欠ですか？おかしいだろ・・・いや、それが『麻帆良だし・・・』的な空気だなとかなってるこのクラスもおかしいだろ・・・え？それとも何か？私がおかしいとでも言うのか・・・？ありえん・・・」

等と頭を抱えながらぶつくさとはやいている千雨くらいではあるが。

この2人には後でリラックス効果のあるハーブティーでも淹れてあ

げよう……そう思わせる光景であった。

土日を挟んで月曜、試験当日だがバカレンジャー＋はまだ学校に来ていなかった。

俺は今、新田先生と一緒に遅刻してやってきた生徒達の誘導をする為に正面玄関前に立っている。

遅刻する生徒は『ぬらりひょん』から通達があったバカレンジャー

＋ だけなのだが……

「なかなか来ないですなあ、アルク先生」

既に1つ目のテスト開始時間前にはなっているので、新田先生も痺れを切らしたかそんな言葉を洩らす。

「ええ、そうですね……全くいつになったら来るのやら……<sup>ウチ</sup>2

- Aの生徒が申し訳ないです新田先生。」

「いえいえ、アルク先生はよくやっていますよ……ネギ先生ももう少し先生としての自覚を持ってくれれば良い先生になれそうなのですがね……」

新田先生から見れば、ネギと生徒達の距離感は先生と生徒の距離感ではないのであろう。

「まあ、今回は生徒達の引率でしたっけ？という事らしいですし、大丈夫だったのか心配ですな……」

「ええ、きつと大丈夫ですよ。」

ネギや生徒達の事は大人の事情により曖昧になっていたりする。

新田先生とそんな話をしていると、ついに予鈴が鳴り始めた。

校門の方には数名の人影がこちらへ向かって来ているのが見え、おそらくバカレンジャー+ だろう。

「最後の悪あがきに徹夜で勉強してたら遅刻アルー！！」

くふえが走りながら叫んでいる・・・それはフラグだよ？

「一時間で起こしてって言ったのにー！！」

くふえに続いてアスナもそんな事を叫び・・・それもフラグだからね？

徹夜からの仮眠は寝坊フラグですって・・・特に人に起こしてもらおうとするのは一番ね・・・

睡眠時間が少なく、走ってきたせいか皆息が荒い。

ネギも身体強化をしている割には息を切らしているのが何ともシユールである。

「お、遅れてきてすみません。この娘、足をケガしてて・・・」

遅刻者を代表してアスナが楓に背負われているゆえを指差してそんな事を言う。

「あ、アルク先生……」

「アルク……」

俺の存在に気がついたのかゆえとネギが呟く。

「遅刻組は別教室の方でテストを受けて貰いますから、新田先生についていくように。……今は何も問いませんから早く行きなさい。ネギ先生は私と一緒に来てくださいね？それじゃ、新田先生お願いします。」

と言っても、春休みに補習があるので特に何かを問うたり、言ったりすることはなかったりする。

「ええ、わかりましたアルク先生。ほら、こっちに……」

「は、はい……すみません……」

遅刻した生徒達は新田先生に任せて、ネギは俺が職員室に連れて行く。

「ほら、フラフラしないで」

徹夜明けの生徒達はフラフラとしているようで、新田先生に注意されているようだ。

「あ、あの……み、みなさん試験頑張っつて！！ボクのせいで魔法の本もなくしちゃったし、ボク足を引っ張っつてばかりだったけど……ボク……ボク……」

遅刻組の生徒達を激励するネギは若干不安そうである。

「ま、まかしといて〜」

「本なんかなくてもなんとかなるアルよ〜」

「ず、ずっと勉強付き合ってくれてありがとうネギ先生」

「あとは任せるでござる〜」

まき絵・くふえ・ゆえ・楓は力なくネギの激励に返答するも何やら自信がなさそうである。

それを見て心配そうなネギの肩に手を置いてアスナは

「大丈夫よネギ。私達にだって意地があるんだからさ、本を捨てたのは私であんたのせいじゃないでしょ？なんとか下から2番目くらいにはなつてやるからあんたはもう安心して休んでなさいよ」  
と、逆にネギを励ましている。

「は、はい・・・でも・・・」

こちらもまた力なく返答するネギだが、遅刻しているのに悠長なものである。

「ほら、遅刻したのですからさっさと別教室に向かってください。」

新田先生もわざわざ下駄箱の辺りで待つてくれている。

「はい・・・ほら、みんな行くよ〜」

なんとも間延びした声でアスナが促し、更に間延びした声で「お」と返答する皆が皆へろへろとした動きで下駄箱に向かっていく。

「アスナさん・・・みんな・・・だ、大丈夫かな・・・」

「ネギ・・・今回は魔法に頼らなかつたみたいだね？どうしたんだい？」

皆がいなくなつたのを確認して、皆を心配しているネギにそんな事を聞いてみる。

「うん・・・最初は魔法で何とかしよう！って思ったけど・・・アスナさんに言われたんだ・・・」中途半端な気持ちで先生をやつてる奴が私達に勉強を教えるなんて、教えられる生徒だつて迷惑だと思ふのよ』ってね。それで気がついたんだよ・・・安易に魔法で成績を上げようなんて甘いつて。だから今日まで魔法を封印したんだ。」

ネギは誇らしげにそんな事を言う。

どうやら、少しは魔法に頼りすぎている自分を反省することが出来たようでよい傾向だと思ふ。

「そうだね、私もそう思うよ。いい機会だし、もう少し魔法を使う頻度を減らしてみたらどうだい？」

丁度いいタイミングだし、魔法に頼りすぎている傾向を改善したいと思つてネギに言つてみるが

「む・・・そうだね・・・考えておくよ。アルク。」

やはり、どことなく不満気にネギは返してくる。

何故魔法関連の注意はこうなってしまふのやら皆目検討もつかないが、唯一魔法について言及できるのは俺とアスナくらいしかない上に、魔法を理解した上で言及するのは俺しかいないので地道に言い続けるしかないだろう。

「うん、そうした方がいいと思うよ・・・それじゃあネギ先生、1時間目は遅刻だと学園長から報告があったから何も無いけど、2時間目からは試験監督をしてもらってからどこの担当か職員室で確認しましょう。」

無駄にいい続けても仕方がないので仕事の話をする。

「うん、わかった。それじゃボク、アスナさん達の様子を見てくるから先に職員室に行つててアルク。」

おそらく、リラックス効果のある魔法を使いに行くのであろう。

俺は既に2時間目からの試験監督クラスは確認してあったが、再度確認するために職員室へ向かった。

テストも終わりクラス成績発表の日がやってきた。

テスト終了から今日までの間に、2-Aのクラスメイトの殆どがバカレンジャー+の欠席理由が公欠で納得してしまっているせいか、千雨は認識の違いによるストレスでまた頭を抱えながらぶつぶつと呟いていたり、心配していたこのかが無事だったことに延々と「このちゃん・・・このちゃん・・・よかったあ・・・」と呟いている刹那の姿があったことは気にしてはいけない。

成績発表のせいか、様々な場所に生徒が集まってワイワイガヤガヤとしている。

ネギはどうやらバカレンジャー + のメンバーと一緒に結果発表を待っているようである。

俺は結果も殆ど見えているので、一人ぼーっと結果を待っているのだが、たまたま近くにいた運動部4人組・まき絵の3人組が俺を見つけたようのでこちらに寄って来る。

「やつぽーアルク君」

「おはよ〜」

「・・・おはよう。」

「ええ、おはようございます。明石さん、和泉さん、大河内さん。あと、学校ですから先生と呼んでくださいね明石さん・・・」

「えへへ、ごめ〜んアルク先生」

ネギのことを「ネギ君」と呼ぶ生徒が多いため、俺も一緒くたにされてアルク君と呼ばれることが多く、その度に言い直させているが効果は薄い。

まあ、親しまれてはいるようなので悪い気はしないのだが。

「そろそろ結果発表ですね。皆さんテストの結果はどうでした？」

担任だし、テストの点数は知っているのだが本人達はどう思っているのか聞いてみることに。

「うーん・・・今回は結構頑張ったかな？テスト3日前にアスナ達が休むし、ネギ君とアルク先生もピンチだったしね。」

「ウチも今回はいつもよりいい結果やったな。」

「私も頑張ったかな・・・？結果も良かったし・・・。」

「ありがとうございます、この次のテストもその調子でやって貰えるといいのですがね？」

笑いながら3人にそんな事を言ってみると

「うーん・・・考えておくよ。」

「せやなあ・・・。」

「うん・・・。」

微妙な返事を頂いたので少し悲しい。

そんなやり取りをしているとついに結果発表が始まる。

『これより第2学年成績順位発表を行います。2年生の学年平均点は73.4点！・・・では第2学年のクラス成績を良い順に発表しましょう！』

周囲がざわつき始める中、ゆうな・亜子・アキラは若干神妙な面持

ちになる。

『第1位・・・2年えー・・・2年F組!!!平均点80・8点!!!  
・・・第2位2年えー・・・S組!!!79・8点!!!』

「んー・・・やっぱりこの辺は無理だよなー・・・ウチのクラスじ  
や。」

「ウチらも頑張ったんやけどなー・・・やっぱり無理やなあ・・・」

「残念・・・」

万年最下位のクラスであったし、無理だと思ってしまうのも頷ける話である。

「んー・・・残念ですね・・・それにしてもまだ2-Aが発表され  
ませんね・・・」

『第10位2-M・・・第11位2-C・・・』

話をしている間にもどんどん順位が発表されていく。

「まあ・・・うん・・・今回結構良かったなーって思ったんだけど  
なー・・・」

「全然出てこんなあ・・・」

「・・・まだ3クラス残ってるし、きつと大丈夫・・・。」

若干落胆の表情が濃くなっている3人がいるが、結果がわかってい

る俺は飄々としてしまっている。

『下から3番目の22位・・・2-P!!70.8点!!・・・次は下から2番目ブービー賞です・・・えーと・・・これは・・・2-Kですね。平均点69.5点次回はがんばってくださいね・・・そして最下位は・・・2-A!平均点61.1点!毎回最下位で大丈夫ですかー?次こそは頑張ってくださいねー!以上でクラス成績発表を終了します。』

「え・・・ええ!?!?そんなあ〜」

「ネギ君とアルク君先生になれないんか・・・?」

「・・・ごめんね、アルク先生・・・」

そんな結果を飄々として受け止めている俺に、3人は暗い表情で言葉をかけてくる。

「いえ、この結果はおかしいですから気にしてませんよ。」

俺のその言葉に3人はどうしてとも言いたげな表情をしたので答える。

「平均点が61.1点だとするとクラス30人の平均点総点数が1833点になり、成績優秀者7名の平均点を90点、居残り勉強組5人の平均点を30点と仮に設定した場合1833点から630点と150点を引くと1053点・・・それを18で割った数が残りの18名の平均点ですが、それが58.5点と明らかに低い平均点になるんですよ。仮に5人が0点だとしても66.8点ですから、この結果は平均点0点の生徒が何名かいないでは出ない結果なんで

すよ。まあ、あくまで推論なんですけどね。」

まあ、そんなことを考えなくても低すぎるのは目に見えてわかるだろう。

そもそもアスナ達も0点を取ってしまうなどということはほぼ無いに等しいのだから、この結果は不当であると判断できる。

『おっと・・・？先ほどの発表にミスがあった模様です・・・現在再計算中ですのでしばらくお待ちください・・・』

俺の話聞いて考えていた3人も、この放送に気が向いたようである。

『審議が終了しました！学園長のミスにより間違った結果が出ていたクラスの結果を正しい結果で発表します・・・間違っていたクラスは2 - A！平均点61.1点でしたが・・・計算した結果！！平均点が81.0点となり0.2点差で・・・なんと！！2 - Aが1位に！！逆転トップです！！おめでとーございます！！この結果には私も驚きを隠せません！！』

「おお！？や・・・やったー！！1位だつてよ1位！！すごい！！？」

「1位やって！ほんまか？ほんまなん？」

「え・・・？・・・えっ？ええっ！？」

その結果に戸惑う3人と、驚きざわつき始める周囲の生徒達がいる。

「3人とも頑張りましたね……いえ、皆さんが頑張った結果でネギ先生は無事になれそうですよ。」

皆が真面目に取り組んでいなくとも、バカレンジャー+の頑張りで最下位からは脱出したであろうが、1位をもぎ取ったことに意味はある。

「うん、ありがとー！アルクく……先生！」

「ありがとーなー」

「……？うん、ありがと。」

3人それぞれ礼を言ってきたが、アキラだけ若干俺の言葉に疑問を抱いたらしく間があったが気にしないことにする。

「それじゃ、アルク先生、新学期からもよろしくね？」

「よろしくなー」

「……よろしく、アルク先生。」

「いえいえ、こちらこそよろしくお願ひしますね明石さん、和泉さん、大河内さん。」

何にせよ、『原作』通りに物事が進んで若干安堵する俺だった。

ちなみに、ネギは『原作』通り早とちりして一人駅まで向かった所をアスナに追いつかれて止められ、駅の改札付近で平均点発表騒動を起こしたようである。

勿論『ぬらりひょん』も一緒であったようだが・・・麻帆良・・・  
本当にそれでいいのか？と思える日でもあった。

6 歩目く麻帆良学園・図書館島を歩・・・かない・後編く（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次からは終業式く始業式までの春休み編です。

2く3歩の構成にしようと考えていますが・・・完全オリジナルは難しい・・・

どなたかオススメのナイフがあれば教えていただけると嬉しいですよ。  
使用用途とかもあると尚良いです・・・

設定小話6 アルクの能力について

前世はしがないインドア派のオタクだったのでこれといった能力はなかったのですが、付与した能力に家事全般をかなり上手くなる・銃器以外の武器全般の扱いがある程度可能になる（得意な獲物はナイフ）・我流というべき体術の使用が可能になる（自身の知っている武術に合うものがない）というチート能力がありますが、ネギま！世界での達人クラス程度であり、また現時点では用いる機会もほぼ無いため無双できるほどの能力ではありません。  
それでも十分チートですよ？出来ないことが出来るようになってますし。

前歩でのチートはもつと酷いクラスのチートでしたので、そこを完全にカットする形で能力が顕現しています。

アドバイスがありましたら是非。

誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

7 歩目〱麻帆良学園都市・女子寮を歩く〱(前書き)

前作4歩目終盤あたりがここまで長くなりました。  
更に続きます。

どうにも投げやり感が・・・

## 7 歩目〱麻帆良学園都市・女子寮を歩く

学年末試験が終了して殆ど授業をしなくなり、日々は早々に過ぎ去って終了式の日となった。

ネギは相変わらずアスナ達と登校しているようで、職員室に来るのが一番遅い。

暗黙の了解となっているのだろうか、一般の先生でさえもそれをあまり注意しないのである。

この辺りは9歳だから〱というところなのだろう。

一応仕事は出来ているし、朝くらいは緩くてもいいという心遣いなのだろうか。

俺はいつも早めに着ているのだが、稀に新田先生から「もう少し遅く来てもいいんですよ?」と注意される。

少しばかり理不尽な気もするが、俺を思ってくれているのだろうしありがたく受け取っておく。

終了式が始まると、『ぬらりひょん』とネギと一緒に壇上へ上がり新年度から正式に採用されることが通達される。

「フオフオフオ・・・皆にも一応紹介しておこう・・・新年度から正式に本校の英語科教員となるアルク・スプリングフィールド先生とネギ・スプリングフィールド先生じゃ。アルク先生・ネギ先生には4月から「3-A」の担任・副担任をしてもらう予定じゃ。」

『ぬらりひよん』からの紹介に周囲の生徒並びに教員からざわめきと拍手が貰えた。

そのまま、学校でよくありそうな終了式の流れを経て皆教室へと戻っていった。

「そういうことですので、来年度もネギ先生共々よろしくお願ひしますね？」

「よ、よろしくお願ひします」

教室に到着して俺とネギは来年度も担任・副担任をすることを再度告げて挨拶する。

「……よろしくーアルク先生ーっネギ先生ーっ。」「」

皆がガヤガヤし始めるが、終業式も終わり帰りのSHRなので問題は……多分無い。

「先生こっち向いてこっちーっ。」

朝倉がデジカメを構えて何度もシャッターを切っているようだ。

「ほら見てーっ学年トップのトロフィー！」

まき絵が俺からすれば微妙なセンスのトロフィーを持ち上げて誇っている。

「おおーみんなネギ先生とアルク先生のおかげだねーっ。」

「アルク先生とネギ先生がいれば中間テストもトップ確定だーっ。」  
ゆーなど『鳴滝風香』がそんな事を言ったが、俺は特に何もしてないしネギも居残り組の勉強を見てただけだから、他のクラスメイトには何もしてない気がするのだが・・・嗚呼、そういえばHRを勉強会にしたか。

「・・・その通りですわ、先生そして皆さん。万年ビリの2-Aがネギ先生とアルク先生を中心に固い団結でまとまったのが期末の勝因！クラス委員長としても鼻が高いですわ。」

ゆーなどふーかに続いてあやかが発言する。

確かに、ネギをクビにさせない為に頑張っていたみたいだったが・・・  
・一応俺も含まれてたけれど。

「今後とも私たちクラス一同よろしくお願いしますネギ先生、アルク先生」

そう言いながらあやかはネギの手を取って跪いた。

「は、はい。こちらこそ。」

ネギが若干挙動不審だがいつものことだ。

それよりも、俺がおまけ扱いなのは気のせいだろうか？

「はい、取り敢えず皆さん気持ちは嬉しいですが席に戻りましょう。帰りのSHRの途中ですからね。」

ざわつきすぎて先に進まないの、生徒達を席に戻すとふーかが拳  
手をしたので指名する。

「ハイツ先生ちよつと意見が！先生は10歳なのに先生だなんてや  
つぱり普通じゃないと思います。」

そうですね、普通じゃないですね。

ちらりと千雨を見てみると、顎に手を当ててうんづんと頷いている。

「えーとっ……」

「それで史伽と考えたんですけどー……」

「今日これから全員で『学年トップおめでとうパーティー』やりま  
せんか!？」

ふーかと『鳴滝史伽』の2人が前置きを色々は無視して提案する。

それを聞いた千雨は盛大に机に頭をぶつけていた。

周囲は

「おーそりゃいいねえー」

「やるーやるー!じゃ、ヒマな人は寮の芝生に集合!」  
と賛成しているのだが。

「……ん?どーしたんですか、長谷川さん寒気でも……?」

どうやらネギがようやく千雨の奇行に気がついたらしく、心配そう

な顔で千雨の顔色を窺っている。

「いえ・・・別に・・・ちょっとおなかが痛いので帰宅します。」

相当ストレスになったのであろう、ネギを振り切って勝手に帰ってしまった。

「え・・・あ・・・ちよっ・・・」

止められずにネギは追いかけてよとするので制止する。

「ネギ先生、本当に調子が悪そうなので早退させましょう。後で私が見に行きますから、今はSHRを続けますよ・・・？」

「う、うん・・・わかったよアルク・・・」

そんなネギを見ていられなかったのか、生徒達がネギにいつもあのようであるということを教えている。

「それより寮行ってパーティー始めよ、ネギ君アルク君」

千雨のことをあまり気にせずに桜子がそう言った。

「椎名さん、先生ですからね・・・」

「はい。」

非常に現実的な考えを持っているせいで、麻帆良という異常環境に耐えかねているのだろう。

だがその分感じたストレスを解消できるNETアイドルという術を持っていて彼女であれば、自らが魔法を知るまでは耐え切ることが出来るであろう。

これから魔法の事を教えてストレス発生量を低下させることも出来るだろうが、それは俺の望むところではないので、教えたりすることはない。

例外は勿論あるのだが・・・

SHRを終えて残った仕事を片付け、寮に戻り千雨の1人部屋の前に立ちインターホンを鳴らしているのだが反応が無い。

試しにドアを引いてみたら開いてしまったので、閉める・・・『原作』通りカギがかかっていないようだ。

無用心だと思つ反面、先ほどのことが相当ストレスになったのだろう・・・カギを忘れるほどに熱心に撮影をしているに違いない。

ドアを開いた時に「おっけ〜今日もちうは綺麗だびょ〜ん」とか若干普段よりも高い声が聞こえて来たのは気にしてはいけない。

ドアを開けてしまったことに若干後悔しつつ、思いっきりドアをノックしても反応が無い・・・集中して取り組んでいるのであろう。

ネギが千雨の部屋に勝手に入るといふイベントを潰してしまった以上、俺としてはクラスに馴染める・・・？様にパーティーには同意を得て連れて行きたいのだが・・・少し時間を空けることにして寮の芝生の所へ向かう。

芝生の所には2・Aの殆どの生徒達が既に集まっていて、何気にエヴァと茶々丸も混ざってそこにいる。

15年も学生生活を続けて飽き飽きしてる・・・みたいなことを『原作』では言っていた割に、こういったイベント的なモノには案外参加してるんだよな・・・俺とネギの歓迎会とか。

「あ、アルク君遅いよー？」

そんな事を考えながら歩いていると、俺が来たことに気がついたゆゑに声をかけられる。

現在は学外でのプライベートな時間であるため、先生と呼ばれていないことを訂正する必要はないだろう。

「ええ、遅れてすいません・・・皆さんもう始めているようですね。」

始めていると言っても、生徒達が桜の木の下で各々自由に過ごしているだけであるが。

木の根元辺りには刹那は1人目を瞑って休んでいるようで、木を挟んで反対側では龍宮と楓は2人で話をしているようである。

俺は丁度その間ぐらいのところ木に背を預けて座る。

すると、丁度目の前に運動部4人組がいる形になり、自然と会話に加えられる。

「そうそう、2回目だけどアルク君おめでとー！」

「おめでとーなー。」

「・・・おめでとー。」

「アルク君もそうだけど、ネギ君もよかったよねー。」

ゆーな、亜子、アキラ、まき絵の順である。

「ありがとうございます皆さん。ネギも色々は無茶苦茶でしたが、正式に採用されてホッとしていますよ。」

それに対して俺は若干苦笑気味に返答する。

「・・・そういえばアルク先生、結果発表の時に『ネギ先生は無事に先生になれそうですよ。』と言っていたけど、あれはどういう意味だったんですか？」

「え？そんな事言ってたっけ？」

「あー・・・確かそんなこと言ってたなー。」

「何？何の話？」

ふと、先日の言葉を思い出したアキラが俺に質問してくるが、その場に居合わせなかったまき絵は置いてけぼりである。

「ああ、その事ですか・・・佐々木さん、期末試験のクラス順位発表日にたまたま3人と一緒に聞いていて、2-Aが逆転1位になっ

た時に私が大河内さんが言った通りの事を言ったんですよ。で、その答えなんですけど、既にあの時私は正式に採用されることが確定していたんですね。」

まき絵に簡単に説明しつつ、その質問に答えると

「成程・・・。」とアキラは素直に頷き

「えー？じゃあ、ネギ君が最終課題貰った時にはもう決まっていたってことー？」ゆーなは更に疑問で返してくる。

「先生ずるっこいわー。」亜子は多分そのことを隠していたことに對して批判？し

「へー？そうなんだー。アルク君もすごいねー。」まき絵はネギを主眼に置いた反応である。

「ネギが最終課題を貰った日に私は正式採用が決まりましたよ、明石さん。それと亜子さん、隠していたことに対しては謝りますが勘違いによる勉強に対する起爆剤にでもなればいいかと思って訂正はしませんでしたよ。」

ゆーなの質問に対して答え、亜子の批判に対して言い訳をしておく。

「あまり嘘はついちゃダメだよ・・・？」

「まあ、2人とも正式に先生になれるんだし良かったよね。」

「せやなあ。」

「うんうん！来年もネギ君と一緒にだとやる気出るよー！」

嘘をついていたわけじゃないんだが、まあいいか……

ふと周囲を見回しているとあることに気がついた。

「ははは、すみません大河内さん。そういえば、クラスの殆どの人  
は着てますけど……ネギが来ていないですね。」

ネギがいないのである。

仕事を終わらせて、俺より先にアスナ達とここに来ていたはずなの  
だが……本当に何処に行ったのだろうか。

「私は知らないかなー？」

まき絵の言葉に頷く3人。

「ネギならなんか『やっぱり長谷川さんが心配なので様子を見てき  
ます！』ってアルク先生がここに着たくらいの時に寮に向かった  
けど？」

その横から現れたアスナは、俺の話が聞こえていたのかそんな事を  
教えてくれる。

「遅れてスイマセンー！」

ネギの声が聞こえたので、そちらを見ると別の学校の制服のような  
ものを着てメガネをしていない千雨を引っ張っている。

「遅いよ先生ー。」

「あれー？誰そのカワイイ子は？まさか先生の秘密の恋人とかー？」

「どこの学校の娘？どこどこー！？」

「わーホントにカワイイー。」

「てゆうーかコスプレ？なんか隠し芸でも見せてくれるの？」

生徒達の反応は多種多様だが好評のようである。

俺はそつとため息をついたが、なってしまった以上仕方がないので上着を脱いでおくことにする。

千雨は急に大勢の人の前にコスプレ+メガネ無し状態で連れて来られたことに焦り始めている。

「ちよつとネギ・・・その子もしかして・・・」

アスナは千雨に気がつきネギに声をかけるが、完全にパニック状態に陥っている千雨が無理やりメガネを奪い返し、その動作で靡いた髪がネギのくしゃみを誘発してしまう。

「は・・・は・・・はくしゅんっ！」

暴走した魔力で『フランス・エクサルマティオー風花・武装解除』が発動してしまい千雨の服を吹き飛ばす・・・ので即座に近づいて上着を千雨の肩にかける。

「な・・・な・・・」

いきなり服が吹き飛び思考がおいつかない千雨をよそに

「おおー！制服が一瞬で吹き飛んだ?!」

「スゴイ手品や!!」

「スゲーネギ先生!!」

と、手品と勘違いして驚いている生徒達。

「……ってアレ？あんた長谷川じゃ……?」

「ち、ちがつ」

「ホントだ、千雨ちゃんだーっ!」

『釘宮円』に気づかれて否定するも、桜子に特定されて大焦りの千雨は説得力のない言葉を吐いている。

……今回もネギの初動を潰しておいたはずなのだが、その後には俺が何もしなかったせいだ。『原作』通りにネギが千雨の部屋に突入したようである。

先日の図書館島の時もそうであったが、初動を潰しただけでは図書館島への侵入を防ぐことはできなかった。

ならば、この『物語』には『修正力』と呼ばれる力が存在するのであるだろうか？

バカレンジャー+にも千雨にも積極的に魔法関連で関わる心算はないのだが……

「……難しそうな顔してどうしたの？アルク君。」

逃げる千雨を追いかけていなかったアキラがそんなことを聞いてくる。

「いえ、ちよつとした懸念がありましたね・・・まあ、問題になることでもないので大丈夫ですよ大河内さん。」

もう2回なのか、まだ2回なのかはわからないが、既に『原作』の舞台に立っているのだからどうなってくるかは俺次第なのかもしれない。

千雨も落ち着いた（落ち込んだ）のを皮切りに、パーティーのテンションも緩やかに下降傾向を辿ってお開きになった。

決して千雨がパーティーのテンションを下げたわけではないことをここに宣言しておく。

ちなみにネギが千雨の部屋に行った時はちゃんと千雨がノックに反応したらしく、別の学校？の制服姿で出てきたところを引っ張ってきたようである。

多少『原作』とは違った展開ではあったが、カギが開いていたから勝手に入ったという事実がなくてよかったと思う。

結局コスプレのまま会場まで引っ張ってきた拳句に、脱がしてしまつたことに変わりはないが・・・

漸く春休みが始まる。

今後も短い期間の中で様々な事が起きることは確定しているようなものなので、春休み中に武器の調達をすらしよう。

そして春休みが始まつた。

7 歩目く麻帆良学園都市・女子寮を歩くく（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

終業式だけで1歩使ってしまいました。

一週間弱間があいてこれは少し微妙ですね・・・

次はもっと時間がかかりそうな・・・

設定小話7 アルクの武器

得物は銃火器及び和製武器以外の武器が殆ど使えるという能力を持っているのですが、一番得意なモノはナイフでそこその耐久性を持つたナイフであれば解体など容易に出来るほど扱いが上手いです。

ですが、日本の法律的に持ち込みがアウトだったので現時点では武器を所持していません。

あるとすれば、初心者用の杖くらいです。

アドバイスがありましたら是非。

誤字脱字についてもありましたら教えていただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6336z/>

---

双子の兄が歩く道～ネギま！～

2012年1月6日12時48分発行